
外伝 **ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険**

undervermillion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外伝 ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険

【Nコード】

N0186X

【作者名】

undervermillion

【あらすじ】

本作品は、「ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険」の外伝です。

この作品を読まなくても、本編には問題有りませんが、本編を読まないといこの作品は理解できないと思いますので、事前に本編をご覧ください。

なお、本作品の掲載は不定期です。

R-15を入れておりますが、今後の事を考慮にいたしたもので、該当話に対して改めて記載します。

第1話 口を動かすだけの簡単なお仕事です(1) (前書き)

本作品をお読みいただきありがとうございます。

思いつきだけで作っております。

掲載も不定期です。

ご了承ください。

第1話 口を動かすだけの簡単なお仕事です(1)

「いつも、旨いね。セレン」

「ありがとう。アーベル」

「礼を言うのは、こっちの方だ」

アーベルは、料理を味わいながら、感想を述べる。

「毎日でも食べたいぐらいだ」

「そ、それって・・・」

セレンは、アーベルの感想に思わず声を詰まらせた。

セレンは、アーベルが不在の間に、料理の技術を磨いていた。

その努力が報われたのだ。

セレンは、目をうるませながら料理を始めたきっかけを思い出していた。

「キセノンめ！成り上がり者のくせに！」

男は顔を赤くして、酒場で大声を出していた。

酒場では、だれもが大声を張り上げる。

普段なら、よくある話ですむのだが、この男の行動は、違和感があった。

今の時間帯が昼間である。

普通の酒場なら、夜から営業を開始するのだが、ここは冒険者を登録するルイードの酒場の近くにあるため、昼間も空いているのだ。

そう、男は、昼間から仕事もせずに酒を飲んでいるのだ。

そして、もうひとつの違和感は男のテーブルの近くは誰も寄りつい

ていないことだ。

男のテーブルには、いくつもの酒瓶が転がっている。

そして、男の形相がひどかった。

金髪がぼさぼさに乱れ、ひげが伸び放題となっている。

額は油汗でテカっており、アルコールがしみこんだ体の臭いは、人を近づかせない雰囲気があった。

本来であれば、店の主人もこの男を追い出したいところではあったが、金をちゃんと払っているので、無理に追い出すこともできない。誰もが、男の周囲に近づくことが出来ないと思ったが、例外が発生した。

スマートな体に、金髪をきちんと七三にわけ、おしゃれなスーツを身につけた中年の男性が、男に近づいてきた。

「誰だテメーは」

酒を飲んでいた男は、近づくスーツ姿の男性に対して、殺気を込めた視線をおくつたが、スーツ姿の男性は視線に気付かないふりをしてながら話しかける。

「申し遅れました、私はアンモンと申します」

スーツ姿の男性は恭しく頭を下げる。

これから、商談でも始めるような感じにしかみえない。

「モリデンだ」

モリデンと名乗った男は、アンモンと名乗った男に視線をぶつけたまま、横柄に答えた。

「モリデンさん」

アンモンと名乗った男は、モリデンからの視線を気にすることなく話を始めた。

「なにやら、キセノンという人に恨みが有るご様子ですね。私でよろしければ、話をお伺いします」

アンモンは、うさんくさそうに眺めている店の主人に、酒代とチップを渡すと、酒を頼んだ。

モリデンは、アンモンの態度に感心した様子で、

「おう、聞いてくれるのか。」

話は長いぞ、覚悟しな！」

アンモンは、にこやかな表情を崩すことなく、うなずいた。

モリデンは酔っぱらいの特徴である、「同じ話をなんども繰り返す」を十分發揮した。

このため、アンモンはモリデンの話を次のとおりとりまとめた。

「モリデンさんは、著名な楽器制作者であると」

「ああそうだ。王宮に代々楽器を献上していたのは当家だけだ！」

「それなのに、キセノン商会がしゃしゃり出てきたと」

「おう！そつとも」

モリデンは、叫び声を上げるとコップに入っていた酒を飲み干す。

キセノン商会は、アリアハン国内の著名な楽器職人を集めて、一つの同業者組合を作った。

同業者組合は、相互扶助の組織で、互いの技術の提供による品質の向上や、新製品の開発、安定した流通の確立を主目的とする。

同業者組合の設立は、これまで各自で苦労していた問題を、組織化することで一気に解決する。

このことで、職人達も安定した収入を確保することになる。

また、後継者の育成にも一定の役割を果たす。

若者達も将来的に安定した収入が得られると考えれば、よい人材が集まってくる。

キセノン商会は、組織の設立と資金提供を行っているが、利益を独占するつもりはないと、ことあるごとに明言している。実際、流通に当たっては、キセノン商会の独占はされていない。

モリデンも当初同業者組合の趣旨に賛同し加入していたが問題が発生した。

王家への、楽器納入である。

モリデンがこれまで王家に献上していたのは、家畜の骨を加工した笛であった。

家畜の骨を加工しているため、ある程度大きさがそろっていたが、形状が微妙に異なり、式典での演奏時に、楽器に合わせて席順を毎回調整する必要があった。

アリアハン王家からの「形状、大きさを統一するように」の依頼を果たすため、組合が考案したのは木製への素材変更だった。

数年に渡る研究の成果により、できあがった製品は、王家の要求を満たす水準に達した。

現在では、金属製の楽器への移行を考えており、既に試作品は王家に献上され、ファンファールに使用されることになる。

ところが、モリデンはこの計画に反対した。

組合に加盟した他の職人から、計画に参加するように働きかけがあったのだが、モリデンはすべてはねのけた。

キセノンは、組合員ではないにもかかわらず、直接モリデンに計画への参加をお願いした。

しかし、モリデンにとって逆効果であったようで、「俺を追い出すための謀略だ」と騒ぎだし、結局組合から離脱した。

組合から離脱したことで、モリデンの経営が悪化した。組合に加盟している職人の商品は、高い評価が得られているため、逆に加盟していない商品の価値が下落したのだ。そして、王家への納入は、今後同業者組合が納品することになる。そして、自分のこの先に未来が見えないことから、昼間からこつして酒を飲んでいるということだった。

「よくわかりました」

話を聞き終えたアンモンは、頷くとグラスに新しい酒をつぎ込むモリデンに提案した。

「それならば、私が買いましょうか」

「なんだと」

モリデンは、驚愕と不審に満ちた表情で、スーツを着たアンモンに視線を移す。

「ええ、あなたの作品は素晴らしい物ばかりです。全て買い占めます」

アンモンは、どこから持ち出したのかずっしり重い袋をテーブルの上に乗せてきた。

袋から、金貨がこぼれ出す。

「本当か」

「ええ、もちろん」

アンモンの表情から笑顔が消えることがなかった。

第1話 口を動かすだけの簡単なお仕事です(1) (後書き)

本編でセレンが「口を動かすだけの簡単なお仕事です」に異常ともいえる反応を示したことへの説明が不足していたので、外伝として作成してみました。

3話完結です。

今回は、27日に掲載の予定です。

なお、楽器に関する知識は有りませんので、適当に書いております。

第2話 口を動かすだけの簡単なお仕事です(2)

「口を動かすだけの簡単なお仕事です」

「そうですか」

男の提案に、目の前の少女は聞き込んでいた。

薄い水色の長い髪が特徴的な少女は、アリアハンの僧侶の中で一番人気が高かった。

とてもかわいらしく、おとなしく、そして誰に対しても優しく接しているからだ。

彼女が、肉親以外で特別な感情を持っている異性の相手が一人だけいるのだが、その男はアリアハンから遠く離れたロマリアで、別の仕事をしていた。

一方話しかけてきた男は、司祭の服装をしていた。

男の髪は帽子に隠れていて形状が見えないが、後ろに見える髪の色は金色であった。

司祭の服装は、とても質素な様子だが、キチンと整えられており、日常から着こなしていることが伺える。

そして、人に好かれそうな笑顔は、長年修行していなければ身に付かないだろう。

街中で、少女は男性から声をかけられた。

「セレンさんですね」

セレンと呼ばれた少女は、沈みがちな表情を打ち消すと、声をかけたきた男のほうへ向き直る。

セレンは、先日まで、アリアハンの教会でお手伝いをしていたのだが、教会の偉い人から、しばらく自宅で修行するように懇願されて

いた。

セレンは逆らうわけにもいかず、自宅で日々を過ごしていたが、教会の人たちのお役に立てないことを考えると、気分が沈みがちであった。

「はい、あなたは・・・」

「はじめまして、セレンさん。」

私は、先日までロマリアで独自に修行をしておりました僧侶のアンモンです」

アンモンと名乗った男は、慎み深く一礼する。

「・・・」

セレンは目の前の男に緊張していた。

セレンは、人見知りする性格がある。

冒険にでてある程度慣れていたが、3人で冒険していたからだ。今は、周囲に1人しかない。

アンモンはセレンの態度に理解したのか、視線の高さをセレンにあわせて、小さくつぶやいた。

「アーベル王からのご依頼で来ております」

「アーベルから！」

「お静かに、セレンさん」

アンモンは、にこやかな表情をわずかにくずして、喜びの表情をすするセレンに注意を促す。

「アーベル王からは、極秘にと言われております。無論、テルルさんにも内緒でおっしゃっております」

セレンは両手で口をふさぎながら、うんうんと大きく頷いている。

アンモンは、表情を元に戻すと、話を続ける。

「よろしければ、そちらで軽食でも取りながら、お話を聞かせてください」

セレンは頷くと、アンモンが提案した軽食店についていった。

「具体的には、どのようなお仕事ですか」

セレンは、アンモンに質問する。

セレンは、アンモンからアーベルの近況を聞いていた。

アンモンの話は、毎日、セレンにあいたいとぼやいていたとか、毎朝侍女が、アーベルの枕を替えるたびに枕に涙を流した跡がついており、アーベルに「セレンのことが気になって泣いているのですか」と質問すると、顔を真っ赤にしたまま答えないとか、セレンに関係した内容ばかりだった。

セレンは話をするアンモンに対して、いつの間にか信頼する仲間のような感情を持ち始めていた。

アンモンは、目の前に骨で作った笛をセレンの目の前に差し出した。

「とある楽器制作者が、笛を大量に作ったのですが、音がキチンと出るか確認する必要があります」

セレンは、ふむふむと頷いている。

「先日、セレンさんが自宅で修行するようにと言われたそうですが、何をすればいいのか思い悩んでいると思いました」

セレンは、うなずいた。

「もしよろしければ、お手伝いをしていただけると助かります」

アンモンはゆっくりと頭をさげてお願いした。

セレンは目の前の提案について考えていた。

セレンの家には家政婦があり、日常生活でしなければならぬことはない。

当然、毎日朝夕のお祈りは欠かせないがそれ以外の時間はすることがない。

幼なじみのアーベルはロマリアで王位についてにいるし、テルルはキセノン商会で働いていたので、一緒に遊ぶ相手もいない。今日も、沈みがちな気分を晴らすために、近所を散歩していたのだ。

ここで、見知らぬ男から、仕事の提案があつた。

見知らぬ男の提案とはいえ、アーベルが自分の事を心配して様子を見に来てくれた男だ。

セレンは、信用できる相手だと考えていた。

アンモンは説明を続ける。

「あなたのお仕事で得たお金は、めぐまれない子供たちのために、有効に使われます」

教会は、子ども達の為の慈善事業をしている。

しかし、いつだってお金は必要だ。

教会は資金確保に苦労していた。

そして、アンモンは次の言葉で説明を終えた。

「この話をお受けしたことを、アーベルさんが聞いたら、喜ばれると思いますよ」

この言葉で、セレンの意志が決まった。

第2話 口を動かすだけの簡単なお仕事です(2) (後書き)

次回は9月28日に掲載の予定です。

第3話 口を動かすだけの簡単なお仕事です(3)

「セレンちゃん。ちょっといいかしら」

黒い髪の女性が、目の前の少女に声をかける。

長い髪を後ろの髪飾りで止めている。

セレンは思わず身構えた。

セレンは目の前の女性が苦手な訳ではない。

目の前にいる女性の息子が、幼なじみのアーベルであることを思い出して、緊張したのだ。

「はい、ソフィアさん」

「ちょっと、お食事につきあってもらっていいかしら」

「はい、喜んで」

セレンはソフィアの後をついていった。

「このサラダ、おいしいわね」

「そうですね」

セレンはソフィアと一緒に食事を取っていた。

セレンは、楽しくソフィアと話をしていたが、ふと疑問を浮かべていた。

目の前の女性は、セレンと一緒にいても、姉妹と勘違いされるほど、若いと見られるが、アリアハンの宮廷魔術師を任されている。

魔法の研究をするだけでなく、アリアハンで発生した事件の解決を依頼されることもある。

そのため、忙しいはずであるのだが、ゆっくりと食事をしている。問題ないのだろうか。

セレンの心配をよそに、ソフィアがセレンに質問を行った。
「ところで、セレンちゃん。」

元気になったようだけど、家での修行は順調かしら

「ええ、おかげさまで」

「それはよかったわ。」

ところで、見て欲しいものがあるの」

ソフィアは鞆から、細長い木の箱をテーブルにとりだした。

「これは、・・・」

セレンは箱をしげしげとみつめていた。

ソフィアはセレンの反応を確認すると、木の箱のフタをとりはずす。

「あら」

セレンはびっくりした。

自分が手伝った仕事の成果品が手元にあった。

ソフィアが、セレンの反応を確認するようにならばしばらく黙っていたが、口を開いた。

「セレンちゃん。」

この仕事には、どう関わっているの」

「アンモンさんという人から、笛の音を確認して欲しいと頼まれました」

「あら、そうなの。お疲れ様」

ソフィアは、満面の笑みを浮かべた。

「嬉しそうですねソフィアさん」

「ええ、そうよ」

ソフィアは、笑みを崩すことなく言葉が続ける。

「何も気にすることなく、潰すことができるから」

ソフィアは席を立つと、セレンに話しかける。

「ごちそうさま。」

またこんど、ゆっくりお話をしましょう」

ソフィアはこちらを振り返ることなく、会計をすませると、店を出て行った。

「じゅめんなさい」

「気にしなくていいのよ、セレンちゃん」

一週間後に、セレンはソフィアの家を招かれていた。

そこで、セレンは自分が行った行為の結果を知ることになる。

セレンが性能試験のために使用された笛は、全て「セレンちゃん使用済みの笛」として、闇の世界において高値で取引されていた。

セレンには見せなかったが、ソフィアが持っていた笛が入っていた箱の中には一緒に「セレンの肖像画」なるものが入っていたらしい。ちなみに、「セレンの肖像画」は、ソフィアが可愛い息子の為にポルトガに輸送を手配したらしい。

肖像画のことはともかく、笛は売れに売れたらしい。そこでの売り上げにより、アンモンという人物が莫大な利益を独占していた。

アリアハンで、急に笛を持ち歩く男性が増えたことに興味を持ったソフィアが、調査を行った結果、事実が明らかとなり販売網が摘発された。

罪状は本人の許可無く、勝手に本人の名前を商品名に使用したことである。

摘発された笛は全て処分され、販売に携わった人は牢屋の中にいる。

セレンは、ソフィアにどうやって摘発したのか、おそろおそろたずねた。

しかし、ソフィアはにこにここと微笑むばかりで教えてはくれなかつ

た。
セレンは、「世の中には知らない方がいいことがある」「ことを思い出した。」

「それにしても、人の弱みにつけ込んだ、悪辣な方法ね」

「ごめんなさい」

「だから、セレンちゃんは気にする必要はないわよ」

ソフィアは、お茶を飲みながらセレンを慰める。

結局、アンモンという人物は、アーベルからの使いでも何でもなかった。

裏の世界で仕事をしていたが、セレンの人気を知り、今回の計画を立案したそうだ。

「アーベルも、セレンちゃんをロマリアに連れて行けばいいのに」

「そ、そんな」

セレンは顔を真っ赤にして俯いていた。

「まあ、このまま待つのはつまらないわね」

ソフィアは、セレンの為に何をすべきか考えていた。

「そうだ、こうしたらどうかしら」

そういって、ソフィアはセレンに料理の修業を提案したのだ。

「毎日でも食べたいって・・・」

「料理屋を開店したらどうだい。毎日、食べに行くよ」

アーベルは、嬉しそうに答える。

「・・・。そうですか」

セレンは、急に落ち込んだ。

アーベルは、「俺、何かまずいこといった？」と行った表情で悩んだあげく、セレンに声をかけた。

「試食が出来たら、また声をかけてくれ、いくらでも食べるから」

「本当、ありがとう」

セレンは思わずアーベルの手を握って上下に動かす。

アーベルは、セレンの機嫌が直ったのでほっとして、

「ああ、口を動かすだけの簡単な仕事だ・・・」

言わなくてもいい、ひとことを言ってしまった。

第3話 口を動かすだけの簡単なお仕事です(3) (後書き)

とりあえず、「口を動かすだけの簡単なお仕事です」編は終了しました。

ご感想がありましたらどうぞ。

外伝用のネタだけは何本かありますが、仕上げる余裕がありません。時間があれば挑戦してみます。

第1話 ウエイイ開放作戦での演説（前書き）

本編第54話と第55話との間にあったエピソードです。

当初は本編に入れる予定もありましたが、第4章が長くなりすぎるため省略したところです。

第1話 ウエイイ開放作戦での演説

「それでは、お願いします」

ジンクが目の前にいる、少年に声をかける。

少年は、冒険時の服装の上に深紅のマントを身につけ、頭上に金の冠をのせていた。

どこかの王子様に見えるが、この少年はロマリアの王様である。

「ああ、わかった」

少年は頷くと、立ち上がり、兵達の前に登場する。

目の前の兵士は約1,200人。

首都ロマリアを防衛する部隊である。

ジンクから少年に対して、ウエイイ開放作戦における首都ロマリアの防衛を任せる部隊に対して、演説を要請された。

本来、少年とジンクは作戦開始後速やかに、ウエイイ攻略のため、ルーラにより前線に移動する予定であった。

しかし残された部隊を率いるのが、これまで部隊を指揮したことがない内政大臣マニウスであった。

少年に演説の要請があった背景には、マニウスの小心な性格が災いし、兵士達の士気が下がっているのではなんとかして欲しいとのことだった。

少年は、自分も軍隊を率いた経験がないと言って断ろうとしたが、

「近衛兵総統デキウス閣下から一目置かれているので、兵士達の信頼が厚いので問題ない」

と、ジンクとマニウスから言われて、少年は引き受けるしかなかった。

「くれぐれも、「てきとうにやってくれ」とか「私は戦争が大好きだ」とか、言わないでくれよ」

「……わかつてるさ」

少年はジंकからの指摘を適当にあしらうと、兵達の正面にたった。少年は、あらかじめ用意した内容を基に話し始めた。

「諸君。」

今回の戦いは、ウェイイ開放作戦における、ロマリア防衛戦である。諸君の任務は、来るべきモンスターに対して、ロマリアを守ることである。

今回の戦いは、40年ぶりの奪回作戦である。

これまで、多くの人々が奪回を望み、そのたびにモンスターからの襲撃を受け、挫折した作戦でもある。

戦闘という危険な賭に臨むべきではないという声も聞いた。

私が、国外から就任した王だということ、権力を得るためにしくんだ、無責任な作戦ではないかという声も聞いた。

私のことを影で「口先だけの王」と揶揄するものがあることも知っている。

それらの声に対して、私が答えるのはただ一つである。

私は私がロマリア最後の王にならないために、この作戦を行うと。

この国には、現在様々な問題を抱えている。

貧困の問題、格差の問題、軍事の問題、政治の問題、財政の問題。

多くの問題はそれぞれが難問であるため、すぐに解決出来るわけでは無いことは明らかである。

だからといって、私はそれらの問題から逃げることはしない。

王として与えられた役割に、逃げるという選択肢は始めからないからだ。

私が逃げない限り、ロマリアは王国としての輝きを持ち続けると信じている。

諸君。

私は、諸君を信頼している。

私が先ほど話した問題は、元をただせば一つの原因から始まっている。

モンスターの侵略である。

モンスターを殲滅することで、問題を解決する糸口であることを私は知っている。

そして、諸君の能力で実現可能だという事も知っている。

諸君。

ロマリアはかつて、広大で美しい国だったことを私は知っている。

一面の小麦畑、子どもでも小魚や貝を取ることができる小川、家畜を放し放題にできた草原。

ゆたかではなかったかもしれないが、国民全ては楽しく日々を過ごしていたと、ロマリアで産まれた私の母が、祖父から子守歌代わりに聞かされたことを知っている。

その美しいロマリアから、土地を、財産を、生命を奪うモンスターがいる。

モンスターは魔王バラモスによって、統率された動きを見せて、次々と都市を攻略していった。

今の我々には、もはやこのロマリアしか残されていない。

我々には、もはや絶望しか残されていないのか。

我々は、目の前の現実から目をそらし、城の中での闘争を繰り広げるしかないのか。

絶対に違う。

我々が成すべき事は、悲嘆に暮れることでも、隣人を貶めることでもなく、他人の財産を奪うことでもない。

我々が成すべき事は、失われた先祖の土地を、美しかった国土を、

子ども達が無邪気に遊ぶことが出来る広場をモンスターから取り戻すことである。

我々は、これから城外に出て作戦行動を開始する。

まもなく大量のモンスターがこの城を襲撃するはずである。

諸君がこれまでに味わったことのない、大規模な戦闘になるだろう。だが、私は心配していない。

諸君は、遠くノアニールの先にある洞窟で、厳しい訓練を耐えてきた精鋭なのだから。

具体的な作戦を組み立てたのは、デキウス総統が信頼してる部下達だからだ。

私は諸君に英雄的な行動を求めない。

日常の訓練を思い出し、そのまま行動に移せば、必ずや勝利を勝ち取ることが出来るはずだから。

諸君。

私は、諸君を信頼している。

君たちの中には、近衛兵総統デキウスと共にウエイイ開放を望んだ者も多いという。

ウエイイ開放は、モンスターから襲撃を受けた都市を開放する史上初の作戦となるだろう。

そして、私は作戦の成功を疑ってはいない。

だが、ウエイイ開放が成功しても、ここロマリアが滅ぼされたら意味がない。

ここ、ロマリアの防衛が成功して初めて、本当の意味での勝利となる。

この戦いの成功は、諸君の力量にかかっているのだ。

諸君。

私は、諸君を信頼している。

防御作戦は、攻略作戦よりも忍耐が必要となる。

真の英雄は、耐えるときに耐えることを知っている。

37年前のロマリア防衛戦は、我々ロマリアの民が、耐えること、そして英雄であることを世界に示す戦いであった。

諸君がこれから示す戦いも、前回の防衛戦と同じ、いやそれ以上の価値のある戦いとなる。

なぜならば、ウエイイに挑む戦士達を、心おきなく送ることが出来るのも、ウエイイを開放した戦士達をにこやかに迎え入れることが出来るのも、諸君にしか出来ないことなのだから。

諸君。

私は、諸君を信頼している。

諸君が最強の戦士であることを。

諸君。

私は、諸君に期待している。

諸君が死ぬことなくこの戦いを終わらせることを。

諸君。

私は、諸君を確信している。

諸君がロマリアを防衛し、ウエイイを攻略した戦士達を笑いながら出迎えることを。

では行こう、諸君。

栄光を知る、ロマリアの軍旗と共に。

我々の先祖が、ロマリアの軍旗と共に見守っている。

我々の神々が、ロマリアの軍旗のそばで力を与えてくれている。

では行こう、諸君。

ロマリアの栄光のために！
ロマリアの未来のために！」

目の前の兵士達は、紙を持たずに常に兵士を眺めながら話をする王様に感激し、大きな歓声を上げながら、整然と部隊が進軍していた。

「原稿も読まずに演説するとはすごいですね」
珍しく、ジंकは少年を絶賛した。

「魔法の力なのだけどね」

少年はきまりがわるそうに答える。

「魔法？」

ジंकは、しばらく考える。

「噂には聞いていましたが、新魔法ですか」

「そこまで、すぐくはないけどね」

少年は、昔勇者に教えた魔法について説明する。

「「しゃべりだす」ですか」

「汎用呪文なので、MPさえあれば、誰でも使えるよ」

少年は苦笑していた。

「卑怯な気もしますが、まあいいです」

ジंकも苦笑していた。

第1話 ウエイイ開放作戦での演説（後書き）

アーベルも王らしいことをしていたようです。

とはいえ、演説は難しいですね。

精進をしていききたいと思います。

演説編で考えているのは、「結婚式でのスピーチ」と「ロマリア冒険者養成所卒業式でのスピーチ」です。

いつ出来るかわかりませんが、気長にお待ち下さい。

第2話 ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説（前編）（前書き）

第1話ウエイイ開放作戦の約2ヶ月前に行われた演説です。

時系列としては前後しますが、ご容赦願います。

後編も少し遅れて投稿します。

第2話 ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説（前編）

少年は、演台の前に立っていた。

目の前には、用意された椅子が100脚近く、整然と並べていた。

少年は手元にある原稿を眺めながら、演説を開始した。

「本日、諸君が世界最高水準の一つである冒険者養成所を卒業する場に参加できたことを光栄に思う。

私は昨年、アリアハンの冒険者養成所を卒業した。

昨年参加したときは、来年も参加することになるとは、全く思わなかった。

来年も呼ばれるかどうかは、今日の演説内容に対する、諸君の反応によるだろう。

今日は私の短い冒険の旅の中から3つの話をしたい。

たいしたことではない。

3つだ。

私が開発した汎用型呪文、「おもいだす」を使用すれば、すぐに思い出せる内容だ。

最初の話は、点をつなぐことについてだ。

私は、王になる前は、魔法使いとして冒険を続けていた。

だが、養成所に入る直前まで、自分の職業をどうするか悩み続けていた。

悩んだ職業の一つは魔法使い、そしてもう一つは商人であった。

私には、幼なじみがいた。

幼なじみの父親は商人だった。

私と幼なじみは、店に入り浸って、いろいろと道具の効果や製法などを店員に尋ねていた。

無論、店の商売の邪魔にならないように。

幼なじみの父親が経営していた店は、それほど大きな店舗ではなかった。

当然、展示する商品の数も限られていることから、上手に商売をしようと思えば、展示に工夫をこらす必要がある。

その店は、私がこれまで旅したどの店よりも、個性的であり魅力的であり、さらには芸術的でもあった。

来客者には、次も利用してもらおう気になるように、接客に気をつける必要がある。

大きな利益を得るような交渉にあたっては、誠実にしかもこちらの意見が反映されるように、洗練かつ実用的な交渉術を身につける必要がある。

もちろん、交渉術を身につける前に、真摯であることを身につける必要があった。

私は、この店に通わなければならない理由は、何一つなかった。

他の子どもと同じように外で遊ぶこともできた。

母親に甘えることもできた。

父親の仕事が休みの日に、どこかに連れてもらうこともできた。

だが、私はこの店がそれらと同様に魅力的だった。

私は毎日のように店に寄りながら、楽しくそれらの内容を教えてもらった。

それらの内容は魅力的で、将来の職業を目指すときになって、大いに悩むことにもなった。

私は結局、冒険者養成所に入所するにあたって、魔法使いを目指す

ことになった。

母親の仕事である魔法を研究することに興味があったこと、一緒に冒険すると言ってくれた幼なじみが商人を目指すことになったのが、決断の理由だった。

私は将来、小さな店で得られた貴重な経験を生かすつもりはなかった。

だが、アリアハン王からロマリアとポルトガとの交渉を任せられたときに、かつての経験が私によりよみがえってきた。

私は、真摯に交渉を行った。

そして交渉は成功し、前のロマリア王の要請により、私は王位に就くことになった。

私が、かつて得た貴重な経験がなければ、ロマリア王国に船が来ることがなかっただろう。

そして、まもなく始まるであろう、ウエイイ開放計画が実現することも無かっただろう。

そうでなければ、ロマリアは別の未来を見ていただろう。

もちろん、私は店に通っていたときに先を見通して点をつなぐことは不可能だった。

しかし、今になって振り返れば、あまりに明白だった。

繰り返す。

先を見通して点をつなぐことは難しい。

振り返ってつなぐことしかできない。

だから将来、なんらかの形で点がつながると信じなければならぬ。何かを信じなければならぬ。

直感や人生、諸君にとって信じるに値するなにか。

私がこの世界に生を受けてから、信じたものを裏切ったことは一度もなく、私は私として人生を形づけることができた。

2番目の話は、大切なものと、それを失うことについてだ。私は幸運だった。

私が冒険者であったころ、大切な仲間と一緒にだった。モンスターからマヒ攻撃を受けたときに、民間療法と称して仲間から、悪戯をされたこともある。

あ那时的事は絶対に許すことはないが、おおむね楽しく冒険をしていた。

そして、私は勇者と一緒に冒険することを考えていた。

勇者が16歳に達するまでは、勇者と随行するに値する冒険者となるために過ごしてきた。

世界各地を巡り、ポルトガ王から船を入手して、新たなる旅を始める予定だった。

私は、勇者が加入するまでは、パーティのリーダーとして信頼できる仲間達を率いていた。

そして、私はパーティの解散に追い込まれた。

どうして、リーダーの自分が作ったパーティが解散するのか？

交渉が成功したことを知り、前の国王が自分の後任にふさわしいと考えて、担ぎ上げたからだ。

王位に就くのは光栄なことであった、王の責務を果たすことを拒むつもりもない。

ただ、そうして、私の冒険は中断を余儀なくされた。

私が自らの命を賭けて行う旅の目的を阻まれ、仲間を失った。

それは、衝撃的だった。

しばらく、どうすべきか全くわからなかった。

旅の仲間達を失望させたのではないかと感じた。

両親に全てを話し、旅の目的をあきらめることを考えることもあつ

た。

しかし、何か徐徐に私の中で沸き上がっていた。

私は冒険をすることが、魔法を研究することがたまらなく好きだった。

王になったことは、私の気持ちに少しも影響しなかった。

そして、私は王の責務を果たしたら、冒険と研究をやり直すことを決意した。

それから数ヶ月、私は四大貴族を説得し、新たな計画を決めた。

この計画が成功すれば、ロマリア王国は再び隆盛に向けて動き始める。

モンスターに怯えることなく暮らすことができる世界への第一歩が。

私が冒険を中断しなかったら、この計画は起きなかったと私は確信している。

ひどい味の薬草だったが、けが人には必要だったと思う。

私は自分が行っていることが好きで、それが自分を動かしている根幹だと確信している。

仕事は人生の大きな部分を占めることになる。

満足を得るための方法は偉大な仕事だと信じることで生まれる。

そして、偉大な仕事をする唯一の方法はその仕事を好きになることだ。

もし、みつけないのなら探さない。

それは、見つければすぐわかるはずだから。

妥協は禁物だ。

3番目の話は、死についてだ。

冒険は、死と隣り合わせだ。

僧侶の蘇生呪文や、教会での復活が可能とはいえ、万能ではない。

肉体が完全に消滅した場合はもちろん、いろいろな条件で復活が可能な場合がある。

詳細については、諸君は講義を受けたはずだから、ここでは省略する。

私は冒険をしている間、毎朝起きると鏡を見ながら自問する。「今日、冒険で命を散らすとするならば、私は今日の冒険が本当に必要なことだろうか」
もし違うのであれば、私は冒険の方針を変更する必要に気付く。

自分が今日死ぬかもしれないことを覚えておくことは、人生の重要な決断を助ける重要な道具であると私は考えている。

なぜなら、ほとんどすべてのこと、他人からの期待や、プライド、恥や失敗に対する恐れ、これらのことは死を前にしては消えてしまい、本当に重要なことだけが残るからだ。

いつかは死ぬということ覚えていくことは、私が知る限り、落とし穴を避けるために必要な最善の方法である。
何かを失うと考えてしまう落とし穴を。

死を前にすれば、誰もが丸裸だ。

自分の心のままに行動しない理由がなくなる。

私は、自分が5歳の時、生死をさまよう事故を経験した。

転んで、水の中に入り溺れてしまったという経験だ。

そのときは母親が助けてくれて、幸運なことに後遺症もなかった。

私は、幸運にも冒険で死んだことは無かったので、この経験がこれまでで最も死に近い体験となる。

この経験を受けて、私は自信を持って次のように言える。

死を望む者はいない。

天国へ行くことを望む人でさえ、そのために死にたいとは思わない。それでもなお、死は我々すべてが共有する運命だ。それを免れたものはいない。

そしてそうあるべきなのだ。なぜなら死はほぼ間違いなく生命による最高の発明だからだ。

死は生命に変化をもたらす主体だ。

古き世代は消え去り、新しい世代に道を譲る。

我々は、新しい世代だが、遠くない未来に、古き世代に移行して消え去ってしまう。

新しい石碑が、風雨にさらされることで刻まれた文字が失われ、やがて誰からも忘れられるように。

我々の時間は限られている。

だから、他人の甘言に従う必要はない。

他人の意見だからでなく、自分で考えて、その意見が本当に自分にとって大切かを考える必要がある。

そして、最も重要なことは自分の心と直感に従う勇気を持つことだ。それは、もちろん自分勝手とは違う。

どんなに強力な戦士でも、パーティの連携が十分でなければ簡単に全滅する。

そして、一緒に戦う仲間が本当に大切な存在であれば、仲間と無事に冒険をすることは何よりも大切なことであることに変わりはない。

「モンスターを食す」という書物がある。

冒険者の必読書の一つだ。

アリアハン出身の元冒険者が、世界中を旅して、そこで戦ったモンスターの肉を調理した内容を記載した本である。

この本が必読書である理由は、モンスターの調理法が記載されているだけでなく、モンスターの生息地や攻撃方法、上質な食材を確保

するための加工方法も記載されている。

最初は1人で作成されたものだが、この本の重要性を理解した冒険者ギルドは、多くの冒険者を派遣して山や海や洞窟を探索して、新しい情報に更新している。

最新版の裏表紙には、降りしきる雪の中にある小さなほこらが描かれている。

海を背景にし、手前には綺麗な銀世界がひろがっているその風景は、冒険者であれば一度は行ってみたい場所だ。

私はここがどこであるか知っているが、この本にはその場所は明記されていないし、私もここで説明するつもりはない。

君たちが冒険者であるならば、自分たちで見つけて欲しい。

風景画の下にはこんな言葉が記されている。

「探し続ける。考え続ける」

これは、最初の作成者が読者の全てに伝えたい言葉だ。

探し続ける。考え続ける。

そして、私は常にそうありたいと願ってきた。

そして今、諸君が卒業するにあたり、皆もそうであって欲しいと思う。

探し続ける。考え続ける。

ご静聴ありがとう」

アーベルの演説に答えたのは、たった1人の拍手だった。

「素晴らしい演説だ」

ジंकは、席から立ち上がると、惜しめない拍手を送る。

アーベルの演説を目の前で聴いていたのは、ジंकだけだった。

卒業式当日、ジंकは用事があったことから、前日に聞きたいと頼んできたのだ。

アーベルも大勢の前で話すのが久しぶりだったので、練習相手にちよつどいいと二つ返事で会場を借りることを条件に了解した。

「事前に練習しないと、大勢の人の前では、上手く話すことが出来ないからね」

アーベルはそう言つて、事前に原稿を作成していた。

「他人の演説を拝借したのだけどね」

アーベルは、頭をかきながらネタをばらした。

「問題ありませんか」

ジंकはアーベルに指摘する。

アーベルはウエイイ開放作戦を発表したばかりだ。

四大貴族を味方にしたとはいえ、貴族のほとんどはアーベルを敵視している。

下手な演説で、批判を増大させる訳にはいかない。

「まあ、誰も元ネタは知らないだろうから、問題ないだろうし」

「それならいいのですが」

会場の奥で、1人の男が2人の話を聞いていた。

男は、アーベルが開発した汎用性呪文「おもいだす」を使用して演説の内容を確認すると、会場を後にした。

翌日。

アーベルの目の前でロングス財政担当官が、演説をしていた。

かつて、ロングスは冒険者として活動していたが、財務大臣ガイウスに能力を見込まれ、家の經理を任されていたが、国の行政に携わ

るようになり、3年前からガイウスの元で、ロマリア王国財政の実務を取り仕切っていた。

ちなみにロングスの前職は、冒険者養成所長であった。

ロマリア王に今日の演説を要請したのも、ロングスである。

「かつて冒険者だったころの経験をお話してもらえたら、卒業生達は喜びます」

と言って。

ロングスは、大きく太った体を揺らし、右目につけている片眼鏡を原稿に向けながら話し始めた。

ロングスの目の前には、椅子に座っている冒険者養成所の卒業生たち、その関係者たち、新しく就任した王の演説を聴きにきた民衆たちで、例年にならない人数が会場に集まっていた。

王の演説はロングスの次であるが、ロングスの演説をしつかり聴いていた。

「私は紹介を受けたロングスだ。

諸君が栄誉あるこの冒険者養成所を卒業する場所で久しぶりに演説することができて嬉しく思う。

前回参加したときは、所長という立場のため、長々と小言を言ったものだが、今日は今の所長が既に話してくれた」

ロングスは、視線を今の所長に向ける。

周囲から笑いが漏れる。

所長も苦笑していた。

「今日は私から、短い冒険の旅の中から3つの話をしたい。たいしたことではない。

次に話をされる、アーベル国王が開発された汎用型呪文「おもいだす」を使用すればすぐに思い出せるものだ」

ロングスは、視線を後方に座るアーベルに一瞬だけ移動させてから、原稿内容を読み上げる。

アーベルはロングスから受けた視線に違和感を覚えた。

まるで、自分を嘲笑するように感じ取ったのだ。

「最初の話は……」

アーベルはロングスの演説を聴いている内に表情が驚愕から、困惑に変わっていく。

ロングスの話している内容が、アーベルが前日に練習で話していた内容と一緒にあったからだ。

当然、アーベルの経験に基づく部分は、ロングスの経験に基づく内容に修正されている。

アーベルは、昨日アーベルの演説を聴いていたのは、ジंकウだけだったと思っていた。

ジंकウは、王宮で別の仕事をしているため、ジंकウに事情を確認することも出来ない。

「本日、諸君が世界最高水準の一つである冒険者養成所を卒業する場に参加できたことを光栄に思う。

私は昨年、アリアハンの冒険者養成所を卒業した。

昨年参加したときは、来年も参加することになるとは思わなかった。俺はそこで言葉を匂切ると、目の前の原稿を取り出して呪文を口にする。

「メラ」

大勢の卒業生が見守る前で、書類は一瞬にして灰になった。

第2話 ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説（前編）（後書き）

「あの人の演説を、アーベルが改変したらどうなるか」という思いつきから始めてみました。

どう見ても「劣化コピー」と言われると思いましたが、覚悟の上で投稿します。

本編も含めて1話が最長になりましたが、演説を区切ることが出来ませんでした。

後編部分も完成しておりますので、少し遅れて投稿します。

第3話 ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説（後編）（前書き）

皆さんは、結婚式のスピーチ等で、前の人の話とかぶったことがありますでしょうか。私はありませんが。そんなことを考えながら作ってみました。

第3話 ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説（後編）

「本日、諸君が世界最高水準の一つである冒険者養成所を卒業する場に参加できたことを光栄に思う。」

私は昨年、アリアハンの冒険者養成所を卒業した。

昨年参加したときは、来年も参加することになるとは思わなかった。俺はそこで言葉を匂切ると、目の前の原稿を取り出して呪文を口にする。

「メラ」

大勢の卒業生が見守る前で、書類は一瞬にして灰になった。

会場内は一瞬静まり、すぐに騒然となった。

それでも、俺の行動を不審に思っても俺は王であった。

卒業生達はその事実を思い出し、やがて再び静寂に包まれた。

「幸運にも、先ほどロングス財政担当官が私の思っていたことを、話してくれた。」

おかげで、あらかじめ用意していた原稿を用いる必要が無くなった。聴衆の何人かは、アーベルの言葉の意味を理解したが、静寂は続いていた。

「ロマリア王として、冒険者諸君に期待することを話そうと思う。一つだけだ。」

諸君の心に深く刻まれる内容であれば幸いである。

モンスターについてである」

アーベルは1Gを取り出した。

「この物体は、モンスターを倒した後に出現するアイテムゴールド

だ。

この物体は、モンスターを生成する場合の触媒と考えられており、魔王の邪悪な力でモンスターが生成されていることと、一度人の手に触れると、直接魔王が触れない限り、二度とモンスターには戻らないと考えられている。

ゴールドは、その性質による希少性と偽造できないことから通貨として世界中で通用している。

冒険者達のほとんどは、モンスターを倒しゴールドを得ることで装備を整えたり、生活の糧にしたりする。

そして、モンスターと戦うことが出来ないほとんどの国民は、冒険者や兵士の力で安全な暮らしを確保している。

その状況が、近い将来変わることになる。

勇者の存在だ。

アリアハン出身の勇者は、あと1年ほどで成人し、冒険を始めることになる。

勇者の目的は、前の勇者オルテガの意志を継いで、魔王バラモスを倒すことである。

魔王バラモスが倒されれば、どうなるか？

モンスターは消滅するかもしれない。

消滅はしないが、その時点で生息するモンスターを倒したら、もう出現しないかも知れない。

実際どうなるかは、魔王を倒すか、魔王に尋ねるしかわからない。

ゴールドの由来の話が正しいかどうか、魔王に尋ねることではかわからないはずだ。

誰かが、魔王に尋ねたのだろうか。

そうならば、質問した人物はある意味、勇者に間違いない」

周囲から笑い声が聞こえる。

「重要なことは、冒険者である諸君にとって、重要な変化が訪れることである。」

これまでのように、モンスターを倒すことで生活の糧を得ることが不可能になるかも知れない。

だからといって、魔王を倒すことを止めることは出来ない。今の状況が続けば、人類が滅亡する。

そうなれば、冒険者であることは不可能だ。

考えが浅い者は、勇者の存在を疎んで、殺害するかもしれない。

私はロマリア王として、そのような存在を許さない。絶対に許さない。

代わりと言うわけではないが、平和になれば、王として諸君らに新たな仕事を斡旋したい。

道路や都市整備の労働者や、治安維持のための兵士として。

新しい時代になれば、その時代にあった労働者が必要とされる。

今、冒険者が求められるように」

卒業生達は、緊張に包まれていた。

ある意味、冒険者の将来を否定する内容だったから。

「幸い、これまで冒険者育成にかかる予算や都市の防衛にかかる予算を、新しい時代に必要な教育予算に移し替えることが可能である。それでも、諸君は心配しているだろう。」

自分は、新しい時代について行くことが出来るだろうか。

私は、確信している。

諸君の力があれば、問題ないことを。

なぜならば、諸君は冒険者という人生を選択したのだから。

冒険者には、常に二つのことが求められる。

「探し続ける。考え続ける」

先ほどロングス財政担当官が話した言葉だ。

その言葉を実践する限り、諸君の前には新しい未来が開かれることを確信している。

だからこそ、ロマリア国王として最初に、養成所を卒業し世界に立つ諸君に、私が考える将来を語ったのだ。

そして、諸君に期待している。

諸君の経験が新しい時代に生かされることを。

冒険者として得られた経験が、新しい未来につながる点であることは確信している。

だから、世界に平和が訪れるそのときまで、諸君は誇りを持って冒険者として生きて欲しい。

当然、冒険者ではない、ロマリア国民にも期待している。

平和になるまでは、引き続き忍耐を求められるかも知れない。

平和が訪れても、日々の生活はすぐに改善されないかもしれない。

それでも、国民が力をあわせれば、立派な将来を描くことができることを確信している。

皆には、国王に力を貸して欲しい。

魔王やモンスターに怯えることなく、楽しく笑いあえる、かけがいのない未来のために。

最後に、この話をするのできる機会を与えてくれた、ロングス財政担当官に感謝する。

ご静聴ありがとう」

聴衆は静まりかえっていた。

ロマリア国王アーベルが話す内容はあまりに衝撃的だった。冒険者の多くは、世界が平和になったあとのことを考えていなかったからだ。

やがて、卒業生の1人が立ち上がり拍手を始めた。他の卒業生達も立ち上がった。

すべての聴衆がそれぞれの想いをこめて拍手した。

アーベルは聴衆の反応に満足そうに頷くと、後ろを振り返る。

アーベルの視線の先には、ロングス財政担当官の姿が映った。

ロングスは、大きな巨体を振るわせながら、なんとか自制をしているが、今にも襲いかかるうとしている様子だった。

だが、この場所で襲いかかることは出来ない。

それを両方が理解しているから、アーベルはにっこりと微笑むと、自分の席に戻っていった。

「いやあ、現場に行つて、話を聞きたかったですね」

ジंकはアーベルの話聞き終わると、残念そうな表情を見せた。

「仕事だったのだろう、内容は聞いてなかったが」

アーベルは疲れた表情でジंकに質問した。

「そうですね、無事に調査が終わったので報告しましょう」

ジंकは、束になった報告書をアーベルに手渡す。

「これは、・・・」

「ロングス財務担当官の不正蓄財に関する資料です」

アーベルは報告書を読みながら、ため息をついた。

「ロングスの不在を突いたわけか」

ジンクは頷いた。

ロングスは、レグルス財務大臣の失脚を知り、自分が後任となるためにいろいろと画策していたようだ、逆に自分から破滅に進むことを知らないで。

「では、俺の演説内容を入手したことも知っていたのか」

「ええ、ロングスが王様に演説を要請したときに、何らかの策略をおこなうと考えていました」

ジンクは嬉しそうな表情をする。

「だったら、事前に教えて欲しい。」

演説に失敗したらどうするつもりだった」

ジンクは笑顔のまま話を続ける。

「上手くいったではないですが、急な対応は出来ないと聞いていたにもかかわらず」

「昨夜考え直したのだ。」

演説の内容自体は問題ないが、自分の立場がロマリア国王だから、それに合わせた内容を話す必要があると思ってるね。

久しぶりの徹夜は疲れたよ」

「お疲れ様でした。」

あまりに集中していたので、声をかけることが出来ませんでした」

アーベルはつかれた頭でしばらく考えると、表情を曇らせた。

「お前は、俺が原稿を直したのを見ていたのか」

「ええ、そうです。」

おかげで、こちらまで徹夜しましたが」

「やれやれ。」

深夜に男の部屋に進入するなんて何を考えているのだから」

「私を襲うことなど、ありえないと知っていますから」

「ああ、そつだな」

アーベルはつかれた体を無理に動かすようにして、寝室に向かっていった。

第3話 ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説（後編）（後書き）

勢いだけで作りました。

しばらく、余裕は有りませんが、出来次第掲載したいです。

第1話 喜んで話を聞かざるを得ない状況に追い込まれた。(前書き)

連れ込まれた部屋の中で編です。

内容については、そのまんまのお話です。

第1話 喜んで話を聞かざるを得ない状況に追い込まれた。

部屋の中にいたジंकが、アーベルに話しかけた。

「やあ、王様」

「ああ、ジंक。助かった」

アーベルは安堵の表情で答えた。

「俺もいるぞ」

「ああ、王子様」

「元だよ、俺は」

部屋の中にいたもう1人の男は、訂正する。

「俺が退位したら、王子様だろ。なんなら、王様でも構わないぞ」

「部屋から追い出してもいいのだよ」

目の前の男は残念そうな顔で声をだす。

「頼むから勘弁してくれ」

アーベルは心の底からお願ひした。

アーベルは、ようやく、身の危険から逃れたばかりだ。

また、あそこに戻るわけにはいかない。

「前から、疑問に思ったのだが」

アーベルは、2人に尋ねる。

「おまえたち本当に仲が良いな」

「愛し合っています」

「将来を誓ったからな」

即答だった。

「……。そうですか」

「聞きたい？ねえ、聞きたい？」

ジंकが、アーベルの視線を遮るように左右に動く。
正直うざりたい。

アーベルは、どうでもよかったが、ここで断れば部屋から追い出されることを確信した。

アーベルは、今しばらくは、ここにいる必要があるので、2人に嫌々頼み込んだ。

「よかつたら、聞かせてくれ」

「その程度じゃダメです」

「本当に腹の心から知りたいと思わなければ、答えるわけにはいかないな」

2人にダメ出しされた。

アーベルは、屈辱に身を震わせたが、怒りを静めると努めて冷静にいや、強い情熱を込めて話を始めた。

「本心を悟られるのがつらくて、表面上はごまかしていた。本当に知りたいと思ってる。

頼む、絶対に今日この機会を逃したくないのだ！」

今日この機会を逃したら、ここを追い出される。

きつと出口で彼女たちが身構えているはずだ。

アーベルには、一応最終手段として、ルーラでの脱出も残されているが、ロマリア国外に脱出するわけにも行かない。

アーベルが逃げ出したら、ロマリアが何をするかわからない。

アーベルが考える最悪の想定は、ウエイイ開放作戦で使用した魔法の玉のことを、ロマリアで公表されかねない。

魔法の玉が安易に世界に広まれば、その破壊力によって、世界は荒廃してしまう。

かといって、ロマリアに逃げ込んでも、祝賀会に参加できず、いらがたまった近衛兵に槍玉に挙げられてしまう。

アーベルは強い忍耐力を持ちながら、2人の答えを待っていた。

「仕方ないわね」

「しょうがない。話してやるか」

「ありがとう」

アーベルは2人に礼をいうと、うれしそうに話を聞き始めた。

夜はさらに深まってゆく。

アーベルは話を聞きながら、この部屋に来るまでの事を思い出していた。

アーベルは、命の危険を感じていた。

本来、凱旋式終了後の祝宴の席で、主賓が生命の危機など感じる事などありえないのだが、アーベルの身体は、自分の考えを否定していた。

アーベルは、目の前の部屋へと、引きずられていた。

アーベルを引きずっているのは、祝宴に参加した貴族の娘たちだ。娘たちは、きらびやかなドレスを身に纏い、片手でスカート裾を持ちながら、もう片方の手で、アーベルの手や腕をつかんでいた。

普段であれば、彼女たちはこのような不法を行うことはなかった。彼女たちがこのような行動を起こした原因はアーベルの行動にあった。

アーベルは、半年ほど前に突然ロマリア王に就任した。

貴族たちは、アーベルがアリアハンから着た、冒険者であること、アーベルが若すぎることから、前の王様が自分の傀儡のために無理やりに就任させたのではないのかと思われていた。

実際、アーベルにとっては事実なのだが。

貴族たちが、アーベルに対する考えを変えたのが、就任後一ヶ月後に行われた4大貴族との会議が行われた後だった。

アーベルは、この国が設立されたときから続いている貴族制度を廃止しようと提案した。

実際には、貴族の特権の段階的な廃止であるが、貴族たちは敏感にアーベルの考えを見抜いていた。

そして、貴族たちが驚愕したのは、傀儡とばかり考えられていたアーベルが4大貴族たちを説得して、アーベルの考えを受け入れたことである。

アーベルが、どのようにして四大貴族を説得したのかは伝わっていない。

それでも、四大貴族が全員納得し反対行動を起こしていないことから、ほかの貴族たちはアーベルを恐れ、何とか退位をさせようと画策していた。

貴族たちの行動が、実を結ぶことなく、ウエイイ解放計画が実施され、アーベルの手によって計画が成功した。

魔王の撃退というわかりやすい成果を入手して。

アーベルは、この実績をもって国民に受け入れられた。

凱旋式という、わかりやすい支持を得られる機会を使う前からである。

貴族たちは、今後の行動をどうするか相談した。

わかりきったことだが、結論はでなかった。

結論が出なかったことで、貴族たちはそれぞれ独自の行動をとるようになった。

それが、今夜の行動となった。

6人の貴族の娘は、それぞれの両親が、あるいは本人の意思によって行動した。

自分たちが王妃になれば、少なくとも自分の家の地位が安泰になると考えていたようだ。

アーベルは、最初は抵抗したのだが、あきらめたのか、じたばた動くのをやめ、目の前の部屋に連れ込まれた。

目の前には、ジンクと前のロマリア王の息子が話をしていた。

「あら、みなさんお揃いで」

「ジンク様」

アーベルを部屋に連れ込んだ女性たちは、女性に対してお辞儀をする。

「やめてくれないか。今日は無礼講だろう」

女性は、アーベルにウインクする。

アーベルは決まり悪そうな顔をしていた。

「お嬢さんがたにお願いがあるのだが」

「何でしょう、ジンク様」

「今つれている王と、しばらく話がしたいのだが」

「！」

アーベルを連れてきた、少女達はジンクに視線を移す。

「ああ、心配はいらないよ。

私には、既に相手がいるから。

人の恋路を邪魔するつもりはないよ」

「わかりました」

「失礼します」

貴族の娘達はおとなく帰っていった。

第2話 まだ、掛け金が制限されていなかった。

私は、貴族の一人娘でした。

祖父はロマリアから南に有る、ネアポリの町で優雅に暮らしていたそう。

しかし、40年ほど前にネアポリの町はモンスターの襲撃を受け、祖父は死亡したそうです。

祖母は、幼い父親を連れてロマリアに避難したそうですが、ロマリアにたどり着くと、逃げる途中に受けた傷が原因で亡くなりました。

私の父は、ロマリアにある別荘で静かに暮らしていました。

やがて、同じネアポリから避難した母親と結婚して私が産まれました。

産まれた私は、ロマリアの家で、貴族の娘として静かに暮らしていました。

たまに、パーティに参加することがありましたが、普段は家で執事に勉強を教わりながら暮らしていました。

幸せな日々でした。

私が7歳の時でした。

私の家が火事で焼け、両親を失いました。

私は、執事に連れられて何とか逃げ出すことができましたが、執事も高齢だったことから、しばらくして息を引き取りました。

私は貴族の娘でしたが、元の領土がモンスターに略奪されていることと、私が女で幼かったことから、家は潰されました。

後で調べたところ、前の財務大臣が全てを仕組んだことを知りました。

私は、頼る者がいないため、孤児院に引き取られました。子どもを売る組織が孤児院の背後に有ることを知り、孤児院から逃げ出しました。

私が逃げ出した日から、自分が女であることを、知られないようにしながら生きることになりました。

私が12歳の時です。

私は、生活の糧を得るために、何とかスリのまねごとが出来るようになりました。

当然、見つかるのと命の保証が無いので、闘技場で稼いで気を許している人を中心に狙いました。

そうやって、毎日をなんとか過ごしていました。

「あやしいかげAが6.7倍でBが6.5倍、Cが6.3倍か」

今日も、ひとりおいしい獲物を見つけたことが出来ました。

今日の獲物となる少年は、予想に集中して、周囲の状況に気を遣っていないようです。

自分とあまり年齢が変わらない少年は、楽しそうな表情で次の試合の掛け率を眺めながら予想を立てていました。

少年の服装は、派手さはありませんでしたが、生地が薄く独特の光沢を示していたことから、貴族、恐らく四大貴族あたりのものと推測しました。

私は、少年の近くに忍び込みました。

「あやしいかげCの倍率が低いのは、防御力が高いのか、回復手段を持っている可能性が高いな。」

1対1ならば勝算はありとおもいますが、集中攻撃を食らえば一気に倒

れそんな感じだな。

おそらく倍率に差がない理由がこれなのだろう。

一方、あやしいかげBだが、Cとは別のモンスターに化けている可能性が高い。

わざわざ、あやしいかげを用意するのであれば同じモンスターであることは主催者の考えからしてあり得ない。

そして、攻撃呪文はベギラマかヒヤダルコあたりか。

イオラが使えるのであれば、Cよりも倍率が下がるはずだ。

となると、今度はあやしいかげAについてはどうだろう。

特殊攻撃を身につけている可能性が高いが、怪しい影の攻撃モーションは、元のモンスターが行う攻撃のような変則的な動きをしないので、観客からの見栄えが悪くなる。

とすれば、あやしいかげAも攻撃呪文を使用する可能性があるな。とはいえ、AとBとに倍率差ほどの実力差があるとは思えないな。

ならば、そこのお嬢さん」

私は、少年が振り向いた瞬間に逃げ出そうとしました。

しかし、少年は私の右腕をつかんでしまって、私を離すことが出来ませんでした。

「お嬢さん」

少年は、優しい表情で私に尋ねました。

「お嬢さんは、どちらが勝つと思いますか」

「わかりません」

私は正直に答えました。

私は、まだ犯行に及んでいません。

強引に抜け出すと不審に思われますので、素知らぬ顔で返事をしました。

一方で、私が女で有ることを見抜いたことに驚愕しました。髪も短くし、服装もかなり汚れているため女で有ることは、これまで知られることはありませんでした。

少年はため息をつきました。

「そうだね。」

決断は、僕がしなければいけないよね。

これまでもそうだった。

これからも、そうなるのだろう。」

少年は自分を戒めるように独り言をつぶやくと、受付に言ってあやしいかげAにお金をかけました。

賭けたお金は1万ゴールドでした。

「さあ、お嬢さん。」

一緒にみようか。」

少年は私の腕をとると、一緒に試合を見ました。

「ありがとう、お嬢さん。」

おかげで、楽しく遊ぶことができたよ。」

少年は、はにかみながら私にお金を手渡しました。

5万ゴールドでした。

「こんなに」

「いいのだよお嬢さん、今日は産まれて初めて当たったのだ。きつと、お嬢さんは僕の女神なのだよ。」

少年は顔を赤くして答えました。

「とはいえ、こんな大金を持っていることを知られたらまずいよね。私は頷きました。」

私には住むところも、泊まる宿も有りませんでした。

このままでは、私はお金を奪われるほうに回ってしまいます。

「そつだ、ごうしょう」
少年は1人で納得すると、私の手を取って、町の中を走っていきま
した。

「こんにちは、おばさん」

「久しぶりね、坊や」

「僕はもう12歳だよ。」

坊やはひどいよ、坊やは」

「私にとっては、坊やは坊やよ」

少年は、小さなお家に私を案内してくれました。
出迎えた女性は、どっしりとした体格で、簡単に私たちを包み込む
ことが出来そうです。

「その子はどうしたの」

「この子をしばらく、預かって欲しいの」

「おやまあ、かわいいお嬢さんね。」

お名前は」

「ジंकクです」

私は、偽名を名乗りました。

孤児院を出たときから、昔の名前は捨てました。

「坊やも、たまには良いことをするのね」

「えっへん」

「たまにはが、いつもになるといいのだけどね」

「えへへ」

「じゃあ、ジंकクちゃん。」

しばらくここで、ゆっくりしなさい」

「いいのですか」

私は驚きました。

出会ってすぐの少年が、見も知らない少女を助けるなんて、あり得ないことです。

そして大人が、子どもの話を詳しく聞かないまま認めることも、あり得ないことです。

「坊やの目に狂いはないわ。

自分の家だと思って、くつろいでね」

私の記憶は、ここからしばらく欠落しています。

嬉しくて、何も考えることが出来なかったのですしょう。

第3話 守るべき時が来たことを理解した。

私は、少年とおばさんの好意に甘えて、おばさんの家で生活する
ことになりました。

少年は、数日ごとに私に会いに来てくれました。

「いいね、その格好は」

少年は、私が質素なドレスを身につけているのを、穴が空くくらい
眺めていた。

「恥ずかしいです」

「でも、他の男には取られたくないな」

「そんな事はないですよ」

「それよりも、ジंकちゃん。

養成所はどうするの」

「ええ、ダーマに行くことを決めました」

「そうかい。」

大変だね」

「がんばります」

「がんばり過ぎて無理をしないようにね」

私は、自分の将来を決めていました。

少年が喜ぶような職業になることを決めました。

「最初にあそびにんで、次に僧侶で、その次に魔法使い、そして一
度遊び人に戻ってからようやく賢者になると」

「これならば、最初があそびにんで、あそびにんから賢者に転職し
たばっかりなのに、何故かイオナズンが使えるようになります」

「面白い、最高だよジंकは」

「確かに、転職後のことを考えたら、ロマリアで勉強するよりはダ
ーマで勉強した方がいいよね」

「正直、さみしいです」

「心配するな、何年でも待ってやる」

出発の前日、私は少年と闘技場に行きました。

私たちが知り合った、きつかけの場所です。

私たちは、あれから何度か足を運びましたが、あのとき以降、少年が当たった事は一度もありませんでした。

少年は、10Gずつしかかけていませんで、それほど懐は痛まなかつたようです。

私たちが、最後の試合として選んだのは、

「今度は、さまようよるいBだな」

「まさか、1万ゴールドはしないわよね」

「父上に叱られてね。」

もう10G以上賭けることができなくなった」

「よかった」

私は、さすがに前回のようなことはこりごりでした。

私たちは、10G支払うと、いつもの場所で観戦しました。

「危ない」

少年は、私の目の前をさえぎるようにして、私を押し倒しました。

「え」

私は、何が起こったのかわからず、地面に座り込んでしまいました。そして、周囲を見回すと、何が起こったのかわかりました。

「どうして?」

闘技場で戦っていたモンスターが、こちらに向かって呪文攻撃をし

たのです。

周囲は炎に包まれています。

「ベギラゴンか。・・・」

少年は、私の肩をつかみながら、答えました。

「大丈夫なの」

「お嬢さんを守れたのなら、大丈夫だ」

少年は、ふらふらになりながらも立ち上がりました。

「俺の命が欲しいのか。」

ならば、かかってこい、相手になってやる」

少年は、戦士としての訓練をしたことがあるようですが、モンスターとの実戦経験はなく、戦えるはずがありません。

闘技場のモンスターが、こちらに向かって呪文を唱えようとしたとき、

「甘い！」

背後から、何者かがモンスターを一撃で斬りつけました。

「強いな。」

ただのさまようよろいではないな」

少年はつぶやくと、ひざをついた。

「大丈夫ですか」

「なんとかな」

少年の顔は青ざめていました。

背中が、やけどをしているようですが、冒険者では無い私は、何もすることができませんでした。

「ジंकよ、聞いて欲しい」

「はい」

「僕は、ジंकを昔から知っていた。

パーティに参加していたのを見かけて、すぐに好きになった。

でも、家が火事で焼けたことを知り、孤児院で生活していると聞いて、助けにいこうとおもった。でも、行方不明になったと聞いた。数年後、君の顔とおなじ子どもが闘技場に現れると聞いて闘技場に入り浸るようになった。

ようやく君に会うことができた。

君には幸せになって欲しい。

僕は子どもで、まだ何も出来ないけど、ようやく助けられることができた。

良かったら、覚えてほしい。

君の事を好きだった子どもがいたことを

少年は、ゆっくりとしゃべっていました。

しゃべり終わると、少年は動かなくなりました。

「死なないで。」

私は、私を救ってくれた、あなたのために生きるのだから！」

私は、少年を強く揺すってしまいました。

医学的には問題があるとおもいますが、私にはそんな知識もありませんでしたし、知っていたとしても、揺するのをやめることは無かったです。

少年は再び目を開きました。

「君の声は、よく聞こえるよ。」

永遠に眠るつもりだったのに、目が覚めてしまったよ」

少年は、微笑んでいたと思います。

私は、涙で少年の顔を見ることが出来ませんでした。

「……。僕は王宮で働く必要がある。

だから、ジंकも賢者になってから、王宮に仕えて欲しい」

「わかりました」

少年は、目を閉じると再び動かなくなりました。

「大丈夫だ」

さまようよろいではない、先ほどモンスターを倒した騎士が、目の前に現れました。

目の前の騎士は、少年を抱きかかえると、

「後は俺に任せるがいい」

といって、どこかに連れ去っていきました。

今回の騒動は、少年の命を狙うため、私たちが観戦していたところにある結界に穴をあらかじめあけておいたそうです。

偶然、モンスターに混じって訓練をしていた、近衛兵総統が事態に気づいてモンスターを全滅させたそうです。

近衛兵総統は、少年の命を助けたことを王様にほめられましたが、闘技場でモンスターに混じって勝手に戦っていたことは怒られました。

しばらく、闘技場が再開されなかったのは、闘技場の結界を修復するためではなく、全滅したモンスターを捕まえるのに時間がかかったそうです。

私は、翌日ダーマ神殿に行つて、冒険者の修行を始めました。

最初にあそびにんとして、冒険を始めることになりました。

あそびにんを仲間にくわえるパーティがあるかどうか心配しましたが、ダーマ神殿で、女性ばかりの3人パーティから声をかけてもらいました。

私の身の上話と、今後の予定をお話すると、「面白そうね」「暇つぶしにはなるわね」といって、私が経験を積むことを手伝っても

らいました。

魔法使いに転職して経験を積んでいた時に、師匠の話を伺いました。仲間の女性に無理を言っ、モシヤスの相手になってもらい、無事に師匠の弟子にっもらいました。

修行を積んだ後は、ダーマ神殿であそびにんに転職し、1人で経験を積みました。

イオナズンがあれば、なんとかまりました。

その後、ようやく賢者になっ、ロマリアに戻りました。後は、アーベルもご存じの話です。

「あとは、酒場で聞いた面接の話か」

「そうです」

アーベルが確認すると、ジンクが頷いた。

「ジンクにはもうあえんと思っっていた」
男が回想した。

「それは、私が言う言葉です」

ジンクが男の手を握っ、答える。

「おもしろい」

アーベルは思わっ笑っしまった。

「王家に伝わる盾を渡さないといけないのかな。

いや、結局王子が王位に就いたら、王家の元に戻るのか意味がないな」

アーベルは自分で話を続けると、さらに大笑いしていた。

「・・・」

「・・・」

2人とも、アーベルが何故笑っているのか理解できなかった。

「さて、話は終わりだ」

「なかなか、いい時間つぶしになった」

アーベルは思わず、本音を言った。

「こころの底から聞きたかったのでは」

男は指摘し、

「お帰りはこちらです」

ジंकは冷たい瞳で扉を指し示す。

「待ってくれ」

アーベルはまだ、外には出たくないようだった。

「ご安心ください。

みなさんはすでにお帰りですよ」

「なんだと」

アーベルは驚いていた。

部屋に入ってから、それほど時間はたっていない。

彼女たちが、自家の安泰を考えるならば、一晩でも待ちかねない。

ジंकは、アーベルの驚きの表情を見ると、クスクス笑いながら解説する。

「人の恋路は邪魔しないといったではないですか」

「そうだな」

アーベルは頷く。

「ですから、彼女たちを慕っている貴族たちをこの部屋の前にお招きしたのです」

「なるほどな」

アーベルは大きく頷いた。

表情は、

「悪辣な奴だ」

と書いてある。

「まさか、自分が慕われると思っていましたか」

ジンクは残念そうな顔で質問する。

「とんでもない。」

彼女たちは、自分ではなく、王位に慕っていたと思っていたのでね」

「そうですね」

「まあ、退位すれば問題ないし。」

後は、まかせたぞ」

「そのときには、私たちが既成事実を作ればいいと」

ジンクは少し顔を赤くして答える。

王様や王子が、結婚する場合、素性を調べられるが、今の状況であればジンクと前王の息子との婚約話が出て誰も文句を言わないだろう。

今なら、誰もアーベルがすぐに退位するとは考えていない。

「そうになると、俺は人の恋路を邪魔する失礼な男になるな。」

馬に蹴られる前に失礼するよ」

アーベルは、二人にお礼を言うと部屋を出ていった。

ジンクの指摘どおり、周囲に人はいなかった。

第3話 守るべき時が来たことを理解した。(後書き)

ドラクエ4のネタで落としました。

アーベルの笑いの沸点は低いかもしれませんが。

また、何か思いついたら掲載します。

とおもったら、部屋から出ることを忘れていましたので書き足しました。

勇者まつなんとかさんの冒険？（前書き）

皆様が、予想以上に勇者の名前に興味を持たれたので驚いています。そのため、急遽ではありますが、外伝を掲載しました。

あわてて書いたので、誤解を招く表現があるかもしれませんが、ご容赦ください。

勇者まつなんとかさんの冒険？

あたしは、勇者まつり。

アリアハンで勇者になるために、訓練をしているわ。

正直、勇者なんてほかにもいるから、訓練なんかしなくても問題ないと思っているけど、王宮の人にふざけるなと大声で怒られたことがある。

別に、勇者になりたいと思った訳じゃないのに、勘弁して欲しい。

あたしが、5歳のときに王宮にある水晶玉にさわったら、急に金色に輝きだしたのでびっくりした。

「おお、本物の勇者だ」

「これで、世界が救われる！」

とか、口々に言われ得るけど、あたしみたいな女の子じゃなくて、大きな大人が集団でなんとかしなさいよ！と思ったけど、口には出さなかった。

誰も、興奮していたから、聞いてもらえないとわかっていたし。

その日から、急にまわりの大人達があたしのことを、「勇者様」とか呼ぶようになって、正直うんざりした。

あたしの名前は、まつり。

ちゃんと名前で呼んでよね。

3文字しかないのに、「まつなんとかさん」とかで覚えている人がいると聞いて驚いた。

そんな人には、「おもいだす」という呪文が必要ね。

まあ、勇者になって良かったことはあったわ。

家はお父さんが、若い頃に無くなったので、お母さんがわずかな収入で家計をやりくりしていたけど、あたしが勇者になったことで王宮から支度金がもらえたみたい。

「これで、生活が楽になった」と喜んでいた。

そのかわり、冒険であたしがもらえる支度金が50Gになるらしい。「最初から大金を持って、強力な武器や防具を持つと、冒険の成長の障害になる」とかなんとか、綺麗な服を着飾った人が言っていた。世界を救う人への先行投資が50Gだけ。それって、おかしいと思うのはあたしだけ？

勇者になるための勉強をしていたけど、あんまり面白くなかったわ。本を読んだり、礼儀作法を学んだり、宝箱を開ける練習をしたり。戦闘訓練も、ひのきの棒を毎日同じようにふりまわすだけ。外に出ることが許されていないから、モンスターと戦ったことが一度もないの。

こんなことで、勇者なんて勤まるのかしら。

ついにこの日がやってきた。

アリアハンから勇者様ご一行が旅立つ日。

でも、王宮の人達はあまり勇者を歓迎しなかったみたい。

「アーベル達が倒すから問題ない」とか

「これで、キセノン商会の力がますます増大する」とか

「まあ、モンスターがいなくなれば問題ない」とか

「勇者オルテガの事もある。過信はできない」とか
「セレンちゃんの後をつけていきたい」とか
いろいろだった。

勇者様ご一行の随行は、アーベルさん、テルルさん、セレンさんだった。

アーベルさんは、3人のまとめ役で、勇者が旅に出るまではリーダーとして世界各地を冒険したらしいわ。

彼は、ロマリア王国という国で、1年ほど王様になったらしい。

毎年、国のトップが変わる国なんておかしいわ。

ロマリアという国なんて、どんな国なのか知らないから、わからないけど。

「まつりさんね。はじめまして」

アーベルさんとはじめてあったとき、あたしにそういつて挨拶してくれた。

黒目黒髪の青年は優しく微笑んでくれた。

少し小柄で、何処にでもいそうなおとなしい青年という感じだったけど、瞳の奥には強い意志が感じられる。

そこらへんのギャップに引かれる女の子もいるらしい。

「元王様」という肩書きに引かれる女の子も多いようだけど。

そんなことを思っているのか、あたしのことを「勇者」と呼ぶことはなかったわ。

よさそうな人だけど、年上には興味ないわ。

噂では、キセノン商会に婿入りする話もあるようだし。

テルルさんは、キセノン商会の創設者キセノンさんの一人娘。

冒険に出る前は、長い髪を後ろでとめて綺麗なうなじが印象的だった。

盗賊に転職してからは、素早い動きに影響が出るといって髪をバツサリ切っていた。

それでも、彼女のクールな表情によく似合っていた。

美しいだけでなく、才能もあるわ。

1年前にアリアハンで発生したあの事件を彼女1人で解決したわ。それ以来、「キセノン商会の1人娘」という色眼鏡で見る人はほとんどいなくなつたわ。

才色兼備という言葉は、彼女のためにあるようなものね。

才色兼備と言えば、昔はエレンズさんというキセノン商会で働いていた娘が一番だったけど、彼女は国外で活躍しているらしいわ。

まあ、あたしが冒険に出たら変わるでしょうけどね。

セレンさんは、男性なら誰もが目を引くスタイルと、幼く見える顔のギャップでアリアハンの男達を虜にしている。

「笛に踊らされた」という言葉は、彼女が巻き込まれた事件から使われ出したらしいくらい、彼女は有名ね。

まあ、あたしもセレンと同じくらいの年齢になれば、身体ももつと成長するし、なにより魔王を倒した勇者として、絶賛されるわね。

あたしは今、3人にあうためにルイーダの酒場の前にいる。

3人はこれから勇者と一緒に魔王を倒す旅に出るため、ルイーダの酒場で勇者が来るのを待っているわ。

あたしは、3人とあまり話をしたことはないけど、勇者であるあたしを歓迎するに違いない。

さあ、この扉を開いてあたしの新しい冒険が始まるわ。

扉はあたしが手を触れる前に開かれた。

あたしは、とっさに後ろにさがった。

「急ぐぞ！」

「待ちなさい、アーベル」

「は、早いです」

「どこに向かえばいいのですか？」

4人の男女が街に向かって走り出していった。

あたしは、走り出す男女が遠ざかっていくのを呆然とながめてから、再びルイーダの酒場の扉に視線を向けた。

扉は開け放たれたままであり、扉の奥から騒然とした声が聞こえてくる。

あたしは気を取り直して、再び扉から入ろうとした。

扉の前には、ひとりの女性が微笑みながらあたしを見つめる。

ルイーダの酒場の女主人ルイーダさんだ。

円熟した大人の表情は、酒場に通う男の冒険者達にとって、癒しとなっている。

その微笑があたしに向けられた。

瞳の奥までは笑っていないようだけど。

「あら、まつりちゃんこんにちは。

せっかく来てもらって悪いけど、あなたはまだ10歳。

この酒場に来るのは、まだ早いわ」

そういつて、あたしの目の前でドアが閉じられた。

たしかに、あたしはまだ10歳。

冒険に出るまで、あと6年待つ必要があるわ。
今日のアタシの冒険は、これで終わりね。

勇者まつなんとかさんの冒険？（後書き）

タンタルさんはどうやら別の勇者（予定）の名前を覚えていた？ ようです。

第13話で触れた、もう1人の勇者です。

なお「勇者まつなんとかさんの冒険？編」は1話で完結です。

着ぐるみにまつわる思い出(前書き)

昔作って、そのままにしていた話です。

何が目的で書いたのか忘れていきます。

需要が有るかどうかわかりませんが、投稿してみます。

着ぐるみにまつわる思い出

「どうしても、着ぐるみを着なければならぬのか」

俺はため息をつきながら、着替えをおこなう。

俺がロマリアに行くときは、着ぐるみを身につけることになっている。

ロマリアで王様をやったことから、いろいろ目立つのを避けるためである。

着ぐるみを着た方が目立つと思うのは俺だけか？

「アーベル。どうして着ぐるみが嫌なの？」

テルルは俺の着替えを手伝いながら質問する。

「それはだな、・・・」

俺は久しぶりに、前の世界での出来事を回想していた。

「僕、アプリン！」

新潟市のマスコットキャラクターだよ。
にいおか

エビルアップルじゃないよ」

大きなリングをかたどったそれは、小さな鳥の羽を模した両腕を左右に動かしながら、自己紹介を始めた。

「新潟市の特産品である、ふじリングと新潟地鶏をモチーフにした愛嬌いっぱいキャラクターなのだ。

去年のゆるキャラコンテストでは、全国大会決勝には残れなかったけど、来年はがんばるよ」

リングの形をしたそれは、左右の手の代わりにある羽を上下に動かしながら愛嬌を振りまく。

「おまえは、何を言っているのだ？」

「キャラクターの自己紹介が必要だと思って」

「いやいや、ここにいるみんなは、知っているから」

周囲には今日のイベントに参加している市役所の職員がスタッフとして集まっている。

アプリンを知らないものはいない。

「イベント中はしゃべれないし」

アプリンには、中の人はいないことになっている。

ならばここで、しゃべるしかない。

「誰に向けて、言っているの？」

アプリンが返事をする前に、外のステージからのアナウンスが聞こえる。

「続いては、みんなのアイドル、アプリンの登場です！」

「早くいけ！」

アプリンは、つきそいの女性とともにショッピングモール内にある特設コーナーに移動した。

「お疲れさん。暑かったでしょ？」

アプリンの着ぐるみを脱いだ俺は、付き添い役の後輩の女性から声をかけられた。

「いや、普通の着ぐるみとは違って、空間があるからそれほど暑くはないよ。」

まあ、夏なら、別だろうけどね」

俺は笑って返事する。

マスコットキャラクターアプリンは球形であるため、内側の空間がかなりあまっている。

俺は、スタツフTシャツを身につけている。

脱いだ着ぐるみは、別のスタツフが代わりに身につけている。

俺は、額に少し汗をかいておりタオルで拭いているが、においが気になるほどの汗もかいていないから、問題はない。

「それにしても、休みの日に動員なんて大変ね」

「問題ない。」

どうせ、独り身だし」

俺は、イベントの開催にあたって、企画した部局とは異なる課であったのだが動員された。

独身で、ゲーム以外特に趣味を持たない俺は、お呼びがかければ積極的に参加している。

実家を離れ、アパートに住んでいるが、町内会への参加は、運動会とゴミ出し程度しか参加していない。町役場の職員なら、たぶん許されないだろう。

実家であれば、いい働き手としてこき使われたかもしれない。

実家は同じく市内にあるが、県職員である兄夫婦が後をついでおり、実家の手伝いもとりあえず不要だ。

「彼女と遊びに行かないの？」

「いない相手と、どうやって遊べと？」

「いなければ、作ればいいじゃない。」

職場には若い子も多いようだし」

ここ数年、正規職員の採用数が激減しているが、不景気による失業者対策と、財政難による採用者不補充対策で、市役所も非正規職員の採用が増えている。

その中には彼女の言うとおり、若い女性もいる。

「俺なんか、相手しないだろう」

事実、彼女たちはあまり俺を相手にしていない。
最初のころは、日常会話をかわすこともあるが、数日すると、なぜか、必要最低限の会話しかしてこなくなる。

うちの部には通称「お見合いおばさん」と呼ばれる女性職員がいて、あちこちから見合い話を持っていくが、俺に声をかけたことがない。

「そ、そうかしら」

「よけいなお世話かもしれないが、君のほうこそどうなのだ」

「よけいなお世話です」

「・・・」

「・・・」

次のイベントまで、二人の間に沈黙が流れた。

1時間後、俺は再びステージにたった。

ステージといっても、30cm程度の高さでしか無く、着ぐるみを着た状況でも、問題はない。

「ありがとうございます」

司会役の女性が、手を振ってイベントの終了を知らせる。

「引き続き、記念写真の時間を用意しております。」

よい子のみんな、きちんと順番を守って並んでね」

俺は、親子と一緒に写真を撮りながら、着ぐるみを着ていなければこんなことはないだろうなどと、現実的なことをかんがえていた。
着ぐるみ効果、恐るべし。

隣に目を向けると、黒い着ぐるみがぼつんとたたずんでいる。

「みなさん、ニイウツシーは並ばなくても写真撮影できますよ〜」

ニイウツシーとは、県と市と新潟市農協が中心となってブランド化した和牛「新岡黒毛和牛」のイメージキャラクターである。

角も含めると2m近い巨体は、黒毛和牛をイメージした黒と併せて見るものに威圧感を与える。

俺個人の感想からすれば、愛嬌のある表情は評価すべきところなのだが。

司会者のかけ声もむなしく、黒い牛の着ぐるみの前には誰も並ぶものはいなかった。

午前中のイベントでも誰も並んでいなかった。

子どもにとって、黒い大きな物体は恐怖をよぶものらしい。

今日はこれまで、3人の子どもが泣いていた。

まったくもって、着ぐるみ効果、恐るべし。

写真撮影も終わる頃、事件が起こった。

「アプリーン〜!」

「!」

「!」

着ぐるみに向かって、両手を広げて抱きつかれた。

着ぐるみからの視界では、相手の顔を確認できなかったが、声と体格から20代の女性のようだ。

「アプリン、かわいい〜」。

写メとって、写メ」

「はいはい」

そばにいるもうひとりの女性が、アプリンに抱きついた女性をあきれて眺めながら、携帯電話を取り出して写真を撮っていた。

「よかったわね」

つきそっていた女性の声は限りなく冷たかった。

「別に」

「役得だったでしょ？」

周囲のスタッフ達は、女性の意見にうんうんと頷いていた。

俺は、役得とは思っていなかった。

着ぐるみはおおきいため、抱きしめられた感触を味わうことができなかつたからだ。

仕事なので、不満はない。

残念とは思ったが。

「別に」

俺の返事に

「やはりそうだったのか」

「20代だったからな」

「奴にはもつたいない」

周囲の反応がおかしい。

「なんですか、みなさんの感想はおかしいですよ」

「おまえは、ロリコンじゃないのか？」

「違います」

「本当のことを言って欲しい。別に犯罪をしていなければ、文句は言わない」

「だから、決めつけないでください!!」

「県内の高校生の制服を全ておぼえていると聞いたが？」

「友人の話です！」

俺の友人の中で制服マニアがいたので、ある程度覚えさせられたが、全部ではない。

「ショッピングモールで中学生の女の子と手をつないで買い物している姿を、目撃されているぞ」

「いつのこと？」

「今年の6月12日、日曜日の午後3時頃」

後輩の女性が、完全記憶保持者のような記憶力を披露する。

「覚えがないな、いや、馬中先輩の娘さんだな」

自分の課にいる先輩の名前を挙げる。

「ほう、馬中夫妻の公認ですか？」

「いや、違う。」

買い物をしていたときに、偶然馬中先輩とその娘さんに出会っただけだ。

そのとき、馬中さんに急用が出来たので、娘さんを預かっただけだ」

「でも、娘さんと手をつなぐ必要はなかったらどう？」

別の人から質問の声が出る。

「娘さんから買い物物の相談を受けて、店の場所がわからないといったら、誘導されただけだ。」

娘さんは携帯を持っていないから、はぐれないようにしただけだ」

「何を買ったのですか？」

後輩の女性が質問する。

「馬中先輩に聞いてくれ、父の日のプレゼントだ」

馬中先輩の娘からは黙っていてくれと言われたが、ロリコン疑惑を否定するためだ。

許してもらえらるだろう。

イベントが無事終了し、片付けを行っているその後輩の女性から声を掛けられた。

「ところで、先輩の許容範囲は何歳年下までですか？」

「考えた事がないなあ」

「6歳年下とかは？」

「微妙な数字だな」

「だめなのですか・・・」

後輩は、急にテンションが下がる。

「そう言う意味じゃない、微妙と言ったのは5歳とか10歳とか言う切りのいい数字では無かった事を言っているだけだ。

年齢よりも、性格があつかどうかだろう。肝心な所は」

「そ、そうですよね」

後輩は何故か喜んで帰っていった。

翌日から、職場の俺を見る態度が変わった。

職場の女性も普通に話しかけてくるようになった。

どうやら、「俺はロリコンである」という疑惑が払拭されたようだった。

だが、俺は職場の女性からお誘いを受けることも、お見合いおぼさんからのお見合いの話しも来なかった。

ああ、俺は自分がもてないことぐらいわかっていたよ。

だから、嫌なのだ。

着ぐるみを着ることで、現実を思い知らされるのが。

俺は着ぐるみに着替え終わっていた。

「で、教えてくれるの？」

「今は勘弁してくれ」

さすがに、前世の話はするつもりはない。

「やっぱり、着ぐるみは可愛いです」

セレンが後ろから抱きしめてくる。

「急ぐぞ！」

俺はセレンをふりほどくと、ルーラを唱えるために部屋を出る。

それにしてもと思う。

見た目のかわいさは、アプリンにかなわないが、触られたときの感
触はこちらの方が上のようだった。

着ぐるみにまつわる思い出（後書き）

アプリン及びニイウツシーは架空のゆるキャラです。
一応、参考にしたゆるキャラはいます。

名探偵だよ？アーベル君（前書き）

第101話で言及のあった、「嫌な事件」について掲載します。

1年を締めくくるには、決してふさわしくない内容ですので、「すがすがしい気持ちで新しい1年を迎えたい」人は、読まれない方がいいかもしれません。

この作品は、いわゆる「推理もの」では有りません。
あらかじめご了承ください。

名探偵だよ？アーベル君

あれは、嫌な事件だった。

「ねえ、何を探しているの？」

「笛だよ、笛」

「笛？」

「そうだ、精霊ルビスを開放するためには、妖精の笛と呼ばれるアイテムが必要だ。

一緒に探してくれ」

俺とテルルは、アレフガルドのマイラの村にいた。

精霊ルビスの助力を得るため、俺たちは精霊ルビスを助けるためのアイテム「ようせいの笛」を探していた。

ようせいの笛の所在についての情報は、事前にラダトームの城で聞き取っていたので問題はない。

「ねえ、アーベル。」

どうして、ラダトームの城内ではあの老人しか会話しなかったの？他の人にも聞いたら、もっと詳しい情報も入手できたかも知れないのに」

「・・・」

俺は、今、全神経を集中して笛の探索に取りかかっている。

テルルからの追及など、全く耳に入ることにはなかった。

俺たちは、温泉の南にある繁みを探しているが、なかなか見つからない。

ひよっとして、地中に埋まっているのか。

俺は、視線をテルルに移す。

「レミラーム」

テルルが、俺の意図を察して、探知呪文を唱える。

怪しいところが光り出す呪文である。

「あそこね」

テルルは、光っているところを、特技「あなほり」で調べると、地面から、木の箱が出てきた。

俺が、箱を取り出して土を取り除き、ふたを開ける。

「もう一つ箱がある」

「土が入らないためかな？」

箱の中に笛が入っているのなら、土が入らない工夫が必要だろう。

中の箱を開けると、布にくるまれた細長い棒状のものがあらわれた。

どうやら、当たりのようだ。

布を、はがすと笛が現れた。

これで、精霊ルビスの封印を解くことができる。

「その笛をどうするつもりだ？」

背後から、俺達を呼び止める声があった。

「そのふえ？」

この笛の名前は、ようせいの笛だったはずだが。

「この笛は、君のかい？」

俺は男の姿を眺めながら、質問した。

目の前で俺を睨み付けているその男は、低くうなるような声と、たくましい体躯、丸く大きな顔をしてまるでダースリカントを人間に

したような姿をしていた。

「残念ながら、僕の笛じゃない」

男は、俺ににらみをきかせながら、説明をはじめる。

「これは、あの子の笛だ」

男は、近くにいる少女に視線を移す。

俺が、男の向けた視線を眺めると、いつのまにか、周囲に人が集まっていた。

その中に男が示した少女がいた。

少女は、この世界では珍しいピンクのノースリーブを身につけ、髪の毛の右側にリボンを付けていた。

顔は愛くるしい小動物のような感じで、まるで子猫のようだ。

猫耳があれば完璧だが、この世界にそんなアイテムは存在しない。

いや「うさみみバンド」なら存在しているので、世界中を旅すればひょっとしたら「ねこみみバンド」も存在するかもしれない。

どうでもいい話だが。

少女は、俺の姿をまるで、おぞましい変態を見るかのような表情で観察している。

俺は変態じゃない。

「あ、あなたが私の笛を盗んで、隠していたのね？」

「これはようせいの笛ではないのか？」

俺は、周囲の村人に問いかける。

「確かにその笛は、ようせいの笛と呼ばれている。

この子の家に伝わっている宝で、この笛が発する神秘的な音色は、魔王の呪いすら打ち砕くことができると言われている」

村人の1人が解説をしてくれた。

「そう、その笛が盗まれて、困っていたのだよ。何故か、村人達が僕を犯人だと決めつけていてね。本当に困っていたのだよ」

男は、獲物を狙う熊のような目つきで俺を睨むと、笑い声を上げる。「これで、僕が無罪で有ることが証明されたよ。

「ありがとう、名も知らない冒険者君」

男の周囲にいた村人達が俺を捕まえようと、俺の周囲を取り囲もうとする。

「アーベルは犯人じゃないわ！」

テルルの必死の反論も、村人達の心には届かなかったようだ。

ここからルーラかキメラの翼で逃げ出すこともできるが、逃げ出せば「自分が犯人である」と自白するようなものだ。

不名誉なえん罪は回避したい。

大魔王を倒すことが最優先だが、変質者として世界中に指名手配がかかれば、両親に合わせる顔がない。

男は、事件が解決したとばかりに、笑顔で俺に話しかける。

「やあ、本当に君には感謝しているよ。

地中に埋めて隠していれば、精霊ルビス様を助けようとする冒険者が、妖精の笛を探すだろうと思っていた。

そして、僕が笛を探す冒険者を草むらで待ちかまえていれば、計画は万全だ。

それにあそこの位置からならば、女湯も覗くことができ完璧だ。僕はまさに天才だね。

あとは、犯人を捕まえたと感謝されて、お礼にもらった笛をなめ放題に・・・」

村人達は、俺に向けていた包囲網を、いつの間にか男に向けていた。

「また、あなたが犯人だったのね」

少女は、悲しそうな表情で男を眺めていた。

「僕もまた、ようせいの笛に踊らされただけの犠牲者の一人に過ぎないんだよ……。」

笛だけに……」

男は、俺に向かってつぶやくと、満足した表情で、村人達に連れ去られていった。

上手いことを言ったつもりか。

「あなたに、お願いがあります」

無事に事件が解決し、ルビスの塔に向かおうとする俺たちを、少女が呼び止めた。

少女は、上目遣いで俺にお願いをする。

少女の愛くるしい、子猫のような表情は、男女問わず保護欲をかきたてられるだろう。

俺は、事件解決のお礼でも言われるかと、少しだけ期待しながら、少女の言葉を待った。

「その笛を、なめ回さないでもらえますか？」

少女の言葉は、あまりにも残酷だった。

「絶対しない！」

俺は、心の底から叫び声を上げた。

「大丈夫よ。」

私が見張っているから、指一本触れさせないわ」
テルルは、悪戯っぽい微笑みで少女に約束した。

「よろしくお願いします」

少女とテルルは、堅い握手を交わしていた。

・・・あれは嫌な事件だった。

名探偵だよ？アーベル君（後書き）

かなり前から、温めていたネタです。

本来なら、テルルがアリアハンで解決した事件を先に掲載したかったのですが、あまり執筆がはかどっていません。

「うさぎの少女は登場しないのか？」
ですか。

よくわからないご質問ですが、登場はしません。

第1話 盗賊と提案とテルルさん（前書き）

「書く」「書く」言いながら、ようやく仕上がりました。

とはいえ、期待に応えられる内容だと自信を持っていえませんが。

テルルがアリアハンで発生した事件を解決した話ですが、これも「推理もの」ではありません。
というか、私には無理です。

このシリーズはR - 15部分を含んでいます。

ご注意下さい。

第1話 盗賊と提案とテルルさん

「いらつしゃいませ」

アリアハンの中心から少し離れた商店で、働いている少女の透き通る声が小さな店内に響きわたる。

「どうも」

店に入った精悍な顔つきをした男が、あわてて返事を返す。

初めて入店した男の表情は、少し困惑していた。

対応した女性の存在に驚いていたようだ。

男が驚いたのも無理はない。

商店の規模自体は、小さいながらも、アリアハンの住民でこの店の事は知らないものはいなかった。

アリアハン最大の商会「キセノン商会」の本店だからである。

世界各地にある支店を統括する事業所は、隣接する5階建ての建物にあるとはいえ、創業者支配人であるキセノンが勤務している店舗である。

「現場の感覚を忘れないように」と、アリアハン市街地の店舗とは別にひっそりと運営している。

来客はまれとはいえ、通常アリアハンで入手できない貴重な品が陳列されていることもあり、昔からの顔なじみや大富豪など、特別な客には好まれている。

そのような、客を相手にするため、通常は経験豊富な店員が対応するだろうと、男は考えていたようだ。

だが、実際に接客の対応をしたのは、少女とよばれても違和感のない女性だった。

男はこの少女が、大きな商談や、特別な注文の対応ができるとは、とても思えなかったからだ。

一方応対した少女は、来客者の顔を眺めて、今来た客は、初めての来店者だなと思っていた。

少女は、華美ではないが、上質な生地で清潔感あふれる緑を基調にした制服をきちんと着こなし、明るい緑色の丸い帽子を被っていた。少女は、お得意様と同様の対応をする。

「ご来店いただきましてありがとうございます、本日はどのような商品をご所望ですか？」

優雅なお辞儀をした少女は、失礼の無い程度に男性の瞳を見つめた。少女の視線の先にある男は、少し困惑した表情をしていた。

男は鍛えられた体をみる限り、歴戦の冒険者に見える。

男の装備品は、皮の鎧等、軽装備であるため、職業は盗賊であることが推測できる。

男は、精悍な顔つきを困惑した表情に変化していたが、瞳の奥にある強い意志は変わらなかった。

男は覚悟を決めて少女に話しかける。

「既製品ではないと思うので、希望した商品が作成できるか教えてほしい」

「かしこまりました、どうぞこちらの席におかけください」
少女は近くにある席を勧める。

「できれば、個室で話をしたいのだが？」

男は、少女に要請する。

「かしこまりました。」

お客様、失礼ですがお名前を確認させていただきたいのですが。

私は、キセノン商会本店営業部のテルルと申します」

テルルは帽子を取り、深々と頭を下げる。

帽子をとったため、帽子に隠された銀色の髪飾りによってまとめられた後ろ髪が左右に揺れている。

男は、揺れた髪に気がつくことなく少女の名前に驚愕の表情を示す。
「キセノン商会の次期当主ですか・・・」

テルルは、男のつぶやきを無視して、先ほどの問いを繰り返す。

「お客様、恐れ入りますが、お名前を確認させてください」

「・・・。失礼、ゲールだ」

「ありがとうございます。」

ゲール様ですね。部屋までご案内いたします」

テルルは、優雅に頭を下げると、ゲールを部屋まで案内した。

「ゲール様、本日はどのような商品をお探しでしょうか？」

テルル一人でゲールと対応していた。

このような商談の場合、直接キセノンが対応することが多かった。
変わった商談の場合、当主が対応した方が迅速に対応できることの
ほかに、新たな商品開発や販売戦略のヒントにつながることも多い
と、キセノンが考えているからだ。

実際、キセノン商会が一代でここまで、規模が拡大した理由はここ
にあった。

そして、今日はキセノンは別の商談のためレーベの村にいた。

キセノンは一人娘に対して同様の経験を身につけさせるため、自分
が不在の場合の対応を任せていた。

テルルは旅にでるまで、責任のある立場で商談を任されたことはな
かった。

しかし、代理を任されてからのテルルの対応で大きな問題が発生し
たことはなかった。

一つ目は、自分の権限と責任がどこまであるか十分把握していたことによる。

キセノンには、テルルに仕事を任せるに当たって、きちんと役割と権限そして責任を明確に説明したからだ。

そして、仕事について不明な点はきちんと納得がいくまで議論しているからだ。

テルルの納得がいかない場合は、キセノンが対応することになるが。

二つ目は、子どもの時の経験による。

テルルは子どもの頃から、キセノン商会に顔を出していた。

これは、幼なじみが店に入り浸っていたことによるものだった。

幼なじみは、子どもには不釣り合いな対応をしており、「キセノン商会の秘蔵っ子」とも噂されていた。

テルルが幼なじみと一緒にいたときの経験は、今の仕事に息づいていた。

「ゲール様、今日はどうのような商品をご所望ですか？」

「棺桶に用いられた技術を基にして、商品を生産してほしいのですが」

「棺桶ですか？」

テルルは、ゲールの提案に驚いていた。

「棺桶」は、死亡した冒険者の蘇生率を高める為に考案されたアイテムである。

命を落とした冒険者が教会で復活できるためには、できるだけ遺体に欠損部分がないことが望まれる。

とはいえ、戦闘行為で欠損部分が発生しないということなどあり得ない。

そのため、遺体の保存を目的に、棺桶の開発が始まった。最初は、大きく重く、運搬にも問題が生じたことから実用化にはほど遠いものであった。

開発が前進するきっかけとなったのが、魔法の解析と命の石の分析、冒険者が持つ袋の製法の提供による。

製法は、門外府出のため詳細は記載できないが、現在の棺桶は冒険者が死ぬとともに冒険者の体を包み込み、これ以上の死体の損傷を守ってくれる。

また、冒険者に支給されている袋に用いられている軽量化の魔法を使用しており、運搬の面でも問題ない。

冒険者に必須のアイテム棺桶は、教会と冒険者ギルドが総力を結集した成果品である。

棺桶は冒険者ギルドに登録した段階で、冒険者に支給される。

だが、棺桶は複数の技術の固まりであり、どのような商品が必要なのか、テルルには想像ができないでいた。

「それで、どのような商品ですか？」

テルルは興味深そうな表情を押し殺しながら質問する。

「透明で、小型化したものが欲しいのですが……」
「ゲールは話を切りだした。」

第1話 盗賊と提案とテルルさん（後書き）

5日連日で掲載します。

第2話 神官と苦悩とテルルさん

「ゲール様の提案内容を確認します」

テルルはゲールが希望する商品の内容を聞き取りしたあとで、確認をする。

「まずは、商品の性能ですが、棺桶の作成に使用されている、死体の腐敗化を防止する技術があれば十分ですね」

「ああ」

「次に、商品の素材ですが外側から中の様子が分かるように、ガラスのような透明な素材で作成して欲しいと」

「そうだな」

「商品の大きさにつきましては、高さ50cm、横幅1m20cm、奥行き50cmでよろしいですね」

「ああ、間違いない」

「最後に、中身の取り出し方は、上の蓋から取りはずす方法でよろしいですね」

「結構だ」

「作成可能かどうかは、これから商品開発部と協議して、5日以内に作成期間及び作成予算を含めて回答させていただきます。

なお、この事前研究及び予算の見積もり費用として1,000Gいただきますがよろしいですか」

「わかった」

ゲールは腰にぶら下げた袋から金貨を数えて手渡した。

「確かにお受け取りしました」

テルルは、表情をわずかにくずしてから、ゲールに質問する。

「もし、よろしければこの商品の使用目的を教えてくださいませんか？」

その場合、こちらの方からいろいろと商品の改良のための提案を行うことも可能です。

また、キセノン商会が同じような商品を販売して利益が上がることが見込まれる内容でしたら、作成に必要な費用から、商品開発費部分を減免させていただくことも可能です」

「それは、ありがたい申し出だ」

ゲールは、にやりとして説明を始めた。

「この世界には多くの変わったモンスターが存在する。

そいつらを捕まえて展示すればおもしろいと考えたわけだ」

「なるほど」

テルルは、しばらくゲールの表情を眺めながらかんがると、

「ところで、ゲール様はどのようなモンスターを展示するお考えですか？」

「そうだね、メタルスライムを考えているよ」

ゲールはしばらく悩んでから答える。

「確かに、あれは貴重なモンスターといえますね。

了解しました。

現時点で断言はできかねますが、商品開発費の減免についてはご検討させていただきます」

「ああ、頼んだよ」

ゲールはそう話すと立ち上がって、一礼する。

「では、また5日後に」

「ありがとうございます」

テルルは、ゲールが店を出たのを見届けてから、考え始めた。

「さて、教会に寄りますか。」

後は、お願いね」

「かしこまりました、お嬢様」

店員がテルルを見送った。

テルルは、教会に入ると知り合いの神官に声をかける。

「ホープさんこんにちは」

「こんにちは、テルルさん。」

今日もおきれいですね」

「あらいやだ。」

お世辞をいつでも何もでませんよ」

「教会ではお世辞をいうつもりはありません」

返事をした神官は、にこやかにテルルの相手をしてくれた。

ホープはがっちりした体格に似合わず、細い顔つきをしていた。

ホープは、かつて世界中を旅し僧侶としての経験を積んでいたそう
だ。

ホープは、教会の力を用いずに、死者を蘇生することが可能な人間
だ。

アリアハンでも数えるほどしか存在しない。

冒険者としてもたまたまに活動し、「モンスターを食す」の改訂版を出
すたびに、冒険者たちの支援活動を行っていた。

ただし、聖職者の階級からすれば、下の方に位置付いている。

教会の階級は、基本的に教会内でどれだけ活躍したかという基準で
評価される。

ホープは20歳以上年下であるセレンと同じ役職にいた。

周囲は教会に対して、問題があるのではと考えていたが、ホープは階級を問題視していないため、今のところ教会への批判にはつながってはいない。

ホープを慕う信者は多くいた。

ホープは少し低めの声で落ち着いて話すことで、多くの人々の心をつかんでいた。

ホープは世界を旅した経験を素直にわかりやすく話して、ルイーダの酒場で毎日飲んだくれている冒険者のように、過去を自慢することも無かった。

さすがに、最近の人気はセレンという若い女性の僧侶に奪われているが、彼女が自宅で修行するようになってから、ホープの人気は再燃している。

そのようなことを考えながら、ホープはゲールからの依頼内容について相談していた。

「モンスターの捕獲用ですか・・・」

ホープはテルルの話を聞き終わると、少し表情が暗くなった。

「何か、問題がありますか？」

「いえ、ご依頼のアイテムの作成自体には、問題はないですが」

ホープは、ロマリアで冒険したときの話を始めた。

「テルルさん。」

闘技場はご存じですね」

「ええ、知っているわよ。」

賭けたことは無いけど」

テルルは答える。

闘技場を否定するつもりはない。

今の時代に、庶民を楽しませるような娯楽がほとんどないからだ。へたに、裏の社会で行われるよりは表の世界で行われた方が、監視しやすいし国の利益につながる。

ロマリアでは、そのような考えで運営していた。

どこかのバカ王子が、大勝ちして一悶着あったらしいが、それを除けばきわめて順調であった。

「セレンさん。」

闘技場のモンスターはどのようにして集められているかご存じですか？」

「知らないけど、ひょっとして、ゲールの依頼内容の技術が使用されているとか？」

「ええ、テルルさんの御想像のとおりです。」

さすが才色兼備といわれるだけのことはありますね」

「そんなことはないわよ。」

そこまで、話してもらったら、話の流れから誰だっかわかるわよ」

「そうとは、限らないと思いますよ。」

まあ、ここまででは私も問題ありません」

ホープは、緩めていた表情を最初の頃のようにもどすと説明を続ける。

「それでは、テルルさん。」

モンスターは、棺桶によってロマリアに運ばれます。

では、死んだモンスターをどうやって闘技場で戦わせると思いますが？」

「まさか、ザオリクで？」

でも、アーベルから聞いた話では、モンスターは復活できないと」

ホープは悲しそうな表情で首を振る。

「実は、すぐに唱えれば復活させることができます。」

もちろん、損傷の状況にもよりますが。」

ですが、その情報は秘匿されています。

その理由も、テルルさんならわかりますよね？」

「想像はつきます」

テルルはそれだけしか言わなかった。

神聖な呪文でモンスターが復活するという情報は、教会にとって秘匿したい内容であることは想像できた。

「ええ、御想像のとおりです。」

そして、私が何を悩んでいるかわかりますか？」

「・・・」

テルルはホープが悩んでいる内容も想像することができた。

しかし、その内容は信仰の問題に触れることになるため、テルルは黙ったままだった。

「お優しいのですね、テルルさんは」

「そ、そんなことはありません」

テルルは否定する。

「いいですよ、どうして神はモンスターの復活をお許しになるのかなんで、私の目の前で話すこともできないでしょうから。」

どうして、モンスターに襲われた村人を生き返らせることが出来ないのでしょうか。

金の無い貧しい者を救うことが出来ないのでしょうか。

失った田畑は元に戻らないのでしょうか。

どうして、勇者でなければ、世界を救うことが出来ないのでしょうか・・・」

「・・・」

2人はしばらく沈黙した。

ホープは落ち着きを取り戻すと、再び話を続ける。

「まあ、これは自分の信仰の問題です。」

申し訳ございません。

今日は、変な話におつきあいいただきありがとうございます。本日のご依頼内容については、教会からよりも冒険者ギルドから技術提供を受けられた方がよろしいかと思えます。

冒険者ギルド宛に紹介状を用意します」

ホープは席を立つと、教会の外までテルルを案内した。

「あら、テルルさん。こんにちは」

テルルは教会の入り口で1人の女性から声を掛けられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0186x/>

外伝 ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険

2012年1月10日12時41分発行